

(19) 日本国特許庁 (JP)

(12) 特 許 公 報 (B2)

(11) 特許番号

特許第5787989号
(P5787989)

(45) 発行日 平成27年9月30日 (2015. 9. 30)

(24) 登録日 平成27年8月7日 (2015. 8. 7)

(51) Int. Cl.

F I

C O 3 B 27/012 (2006. 01)
B 6 5 D 1/00 (2006. 01)C O 3 B 27/012
B 6 5 D 1/00 1 2 O

請求項の数 16 (全 39 頁)

(21) 出願番号 特願2013-512206 (P2013-512206)
 (86) (22) 出願日 平成23年5月25日 (2011. 5. 25)
 (65) 公表番号 特表2013-526478 (P2013-526478A)
 (43) 公表日 平成25年6月24日 (2013. 6. 24)
 (86) 国際出願番号 PCT/US2011/037909
 (87) 国際公開番号 W02011/150065
 (87) 国際公開日 平成23年12月1日 (2011. 12. 1)
 審査請求日 平成26年5月21日 (2014. 5. 21)
 (31) 優先権主張番号 13/114, 779
 (32) 優先日 平成23年5月24日 (2011. 5. 24)
 (33) 優先権主張国 米国 (US)
 (31) 優先権主張番号 61/348, 043
 (32) 優先日 平成22年5月25日 (2010. 5. 25)
 (33) 優先権主張国 米国 (US)

(73) 特許権者 598152242
 エムハート・グラス・ソシエテ・アノニム
 スイス国ツェーハー6330 カーム,
 ヒンターベルグシュトラッセ 22
 (74) 代理人 100140109
 弁理士 小野 新次郎
 (74) 代理人 100075270
 弁理士 小林 泰
 (74) 代理人 100096013
 弁理士 富田 博行
 (74) 代理人 100092967
 弁理士 星野 修
 (74) 代理人 100118083
 弁理士 伊藤 孝美

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 製造後のガラス容器の熱的強化ステーション用底面冷却器

(57) 【特許請求の範囲】

【請求項 1】

I S 機で形成された後のガラス容器を熱的に強化するための装置であって、
 前記ガラス容器を再加熱して、前記ガラス容器の内部に適切な圧縮応力を得るのには十分に高いが、前記ガラス容器が変形するほど高くない温度まで上昇させる特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉と、

中の前記ガラス容器の応力のすべてが固定されるように、冷却ステーション内の前記ガラス容器の外面および内面を、同時に急速に冷却する冷却ステーションと
 を備え、前記冷却ステーションが、

前記冷却ステーションの中に配置されたガラス容器の内部へ挿入するための冷却管において、前記冷却管が、その遠位端に、前記ガラス容器の内部へ冷却用空気を配送する管ノズルを有する冷却管、

前記冷却ステーションの中に配置されたガラス容器の外側に冷却用空気を導く冷却囲い板、および

冷却用空気を、上方へ、前記冷却ステーションの中に配置された前記ガラス容器の底面に導く底面冷却装置

を備え、

前記底面冷却装置が、

前記冷却囲い板の内部で、前記冷却囲い板の頂部より底部の近くに配置された環状の底面冷却器を備え、前記底面冷却器は、冷却用空気を、前記冷却囲い板内の位置から上方へ

10

20

、前記冷却ステーションの中に配置された前記ガラス容器の底部へと導いて、前記冷却ステーションの中に配置された前記ガラス容器の前記外面の前記底部を急速に冷却するように構成して配置され、

前記環状の底面冷却器は中央開口を画定し、前記環状の底面冷却器は第 1 の開口端部から第 2 の開口端部へ延び、前記環状の底面冷却器は、前記冷却囲い板内の壊れた前記ガラス容器の部片を前記中央開口を通して導くように構成されている装置。

【請求項 2】

前記底面冷却器が、前記冷却ステーションの中に配置された前記ガラス容器の直下で軸方向に整列され、前記底面冷却器が、前記冷却ステーションの中に配置された前記ガラス容器から離隔される請求項 1 に記載の装置。

10

【請求項 3】

前記底面冷却器が、

前記冷却囲い板の中でその下端の近くに取り付けられた環状の外側部材と、

前記外側部材の中に調節可能に取り付けられた環状の内側部材とを備え、前記環状の内側部材と前記環状の外側部材とが、その間に、調節可能な環状の間隙をそれぞれの上面に画定し、前記環状の内側部材と前記環状の外側部材とが、その間に、前記環状の間隙と環状に流体連通する環状の窪みも画定して、前記環状の窪みに冷却用空気が供給されるとき、前記冷却用空気が、前記環状の窪みに流れて、前記冷却ステーションの中に配置された前記ガラス容器の底面上への環状の流体ジェットとして、そこから高速で流出することになる請求項 1 に記載の装置。

20

【請求項 4】

前記環状の内側部材および前記環状の外側部材の外面が、コアンダ効果を促進するように構成して配置されることにより、前記環状の内側部材の内径に近い周囲空気が、環状の流体ジェットに吸い込まれることになり、それによって、前記冷却ステーションの中に配置された前記ガラス容器の前記底面に導かれる冷却用空気の量が増加する請求項 3 に記載の装置。

【請求項 5】

前記環状の外側部材が、前記環状の内側部材とねじ係合することにより、前記環状の間隙が、前記環状の内側部材と前記環状の外側部材の一方を他方に対して回転させることによって調節され得る請求項 3 に記載の装置。

30

【請求項 6】

前記環状の内側部材と前記環状の外側部材の一方に設置して、他方と選択的に係合させ、前記環状の内側部材と前記環状の外側部材の間の回転を防止する環状の固定要素をさらに備える請求項 5 に記載の装置。

【請求項 7】

前記環状の間隙は、前記環状の流体ジェットが、上方へ、半径方向の内側に、前記冷却ステーションの中に配置された前記ガラス容器の底面へと導かれるように構成して配置される請求項 3 に記載の装置。

【請求項 8】

前記環状の内側部材の外側の上部が、断面が弓形になって内側に湾曲しており、前記環状の外側部材の内側の上部が、その頂部で、断面が弓形になって内側に湾曲している請求項 3 に記載の装置。

40

【請求項 9】

前記環状の内側部材の内径が、前記冷却ステーションの中に配置された前記ガラス容器の外径より大きい請求項 3 に記載の装置。

【請求項 10】

前記環状の外側部材の外径に配置され、前記環状の窪みと流体連通する冷却用空気入口をさらに備える請求項 3 に記載の装置。

【請求項 11】

前記環状の窪みが、前記環状の外側部材の内側に配置されている請求項 3 に記載の装置

50

。

【請求項 1 2】

IS機で形成された後のガラス容器を熱的に強化するための装置であって、

前記ガラス容器を再加熱して、前記ガラス容器の内部に適切な圧縮応力を得るのには十分に高いが、前記ガラス容器が変形するほど高くない温度まで上昇させる特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉と、

中の前記ガラス容器の応力のすべてが固定されるように、冷却ステーション内の前記ガラス容器の外面および内面を、同時に急速に冷却する冷却ステーションとを備え、前記冷却ステーションが、

前記冷却ステーションの中に配置されたガラス容器の内部へ挿入するための冷却管において、前記冷却管が、その遠位端に、前記ガラス容器の内部へ冷却用空気を配送する管ノズルを有する冷却管、

前記冷却ステーションの中に配置されたガラス容器の外側に冷却用空気を導く冷却囲い板、および

冷却用空気を、上方へ、前記冷却ステーションの中に配置された前記ガラス容器の底面に導く底面冷却装置

を備え、

前記底面冷却装置が、

前記冷却囲い板の内部で、前記冷却囲い板の頂部より底部の近くに配置された環状の底面冷却器であって、前記冷却ステーションの中に配置された前記ガラス容器の直下で軸方向に整列された底面冷却器を備え、

前記底面冷却器が、冷却用空気を、上方へ、前記冷却ステーションの中に配置された前記ガラス容器の底部へと導いて、前記冷却ステーションの中に配置された前記ガラス容器の前記外面の前記底部を急速に冷却するように構成して配置され、

前記環状の底面冷却器が、前記冷却囲い板の前記底面の近くに取り付けられた環状の外側部材を有し、

前記環状の底面冷却器が、中央開口を画定し、前記外側部材の中に調節可能に取り付けられた環状の内側部材も備え、

前記環状の内側部材と前記環状の外側部材とが、その間に、調節可能な環状の間隙を画定し、そこから、前記冷却用空気が、前記冷却ステーションの中に配置された前記ガラス容器の底面へと流れることになり、

前記環状の内側部材の内径が、前記冷却ステーションの中に配置された前記ガラス容器の外径より大きく、

前記環状の底面冷却器からの前記冷却用空気は前記中央開口とは異なる開口から導かれる、装置。

【請求項 1 3】

IS機で形成された後のガラス容器を熱的に強化するための装置であって、

前記ガラス容器を再加熱して、前記ガラス容器の内部に適切な圧縮応力を得るのには十分に高いが、前記ガラス容器が変形するほど高くない温度まで上昇させる特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉と、

中の前記ガラス容器の応力のすべてが固定されるように、冷却ステーション内の前記ガラス容器の外面および内面を、同時に急速に冷却する冷却ステーションとを備え、前記冷却ステーションが、

冷却用空気を、上方へ、前記冷却ステーションの中に配置された前記ガラス容器の底面に導く底面冷却装置を備え、

前記底面冷却装置が、

前記冷却囲い板の内部で、前記冷却囲い板の頂部より底部の近くに配置された環状の底面冷却器を備え、

前記底面冷却器は、前記冷却ステーションから出ることができる開いた中央開口を画定し、

10

20

30

40

50

前記底面冷却器は、冷却用空気を、上方へ、前記冷却ステーションの中に配置された前記ガラス容器の底部へ導いて、前記冷却ステーションの中に配置された前記ガラス容器の前記外面の前記底部を急速に冷却するように構成して配置され、

前記環状の底部冷却器からの冷却用空気は前記中央開口とは異なる開口から導かれる、装置。

【請求項 14】

前記環状の底面冷却器は環状の外側部分と環状の内側部分とを含み、前記底面冷却器は前記環状の外側部分と前記環状の内側部分との間から前記冷却ステーション内に配置された前記ガラス容器の前記底部に向けて冷却用空気を導く、請求項 1 に記載の装置。

【請求項 15】

前記中央開口は第 1 の周囲を有し、

前記環状の外側部分と前記環状の内側部分との間に、冷却用空気が導かれる空隙があり、

前記空隙は第 1 の周囲を有し、

前記第 2 の周囲は前記第 1 の周囲より大きい、請求項 15 に記載の装置。

【請求項 16】

前記環状の底面冷却器からの冷却用空気は前記中央開口とは異なる開口から導かれる、請求項 1 に記載の装置。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

関連特許出願の確認

本特許出願は、2010年5月25日出願の「Post-Manufacture Glass Container Thermal Strengthening Method」という名称の米国特許仮出願第61/348,043号、および2011年5月24日出願の「Bottom Cooler for a Post-Manufacture Glass Container Thermal Strengthening Station」という名称の米国特許出願第13/114,779号の優先権を主張するものであり、これらの特許出願は、参照によってその全体が本明細書に組み込まれる。

【0002】

本出願は、7つの他の同時出願の同時係属特許出願、すなわち「Post-Manufacture Glass Container Thermal Strengthening Method」という名称の米国特許出願第13/114,628号、「Post-Manufacture Glass Container Thermal Strengthening Station」という名称の米国特許出願第13/114,649号、「Cooling Tube Mechanism Operation in a Post-Manufacture Glass Container Thermal Strengthening Station」という名称の米国特許出願第13/114,668号、「Cooling Tube Nozzle for a Post-Manufacture Glass Container Thermal Strengthening Station」という名称の米国特許出願第13/114,688号、「Cooling Shroud for a Post-Manufacture Glass Container Thermal Strengthening Station」という名称の米国特許出願第13/114,744号、「Base Cooling Nozzle for a Post-Manufacture Glass Container Thermal Strengthening Station」という名称の米国特許出願第13/114,765号、および「Post-Manufacture Glass Container Thermal Strengthening on a Conveyor」という名称の米国特許出願第1

10

20

30

40

50

3 / 1 1 4 , 8 0 2 号と関連するものであり、これらのすべてが本特許出願の譲受人に譲渡されており、これら 7 つの特許出願のそれぞれが、参照によってその全体が本明細書に組み込まれる。

【 0 0 0 3 】

本発明は、一般に、強化されたガラス容器の製造に関し、より具体的には、ガラス容器の製造ラインにおいて、ホットエンドとコールドエンドの中間位置でガラス容器を熱的に強化するための装置における底面冷却器の構造および動作に関する。

【 背景技術 】

【 0 0 0 4 】

瓶などのガラス容器に使用される、2つの広義の範疇のガラス、すなわち「硬質」ガラスおよび「軟質」ガラスがある。ホウ珪酸ガラスとも称される「硬質」ガラスは、シリカおよび酸化ホウ素で作製され、非常に高温度を必要とし、形成するのがより困難であり、優れた熱応力特性を有するが、製造するのに軟質ガラスを上回るコストがかかる。「軟質」ガラス、またはソーダ石灰もしくはソーダ石灰ケイ酸塩のガラスは、ソーダ、石灰、シリカ、アルミナ、および少量の清澄剤で作製され、低温で製作され得て、形成するのがより簡単で、より安く製造されるが、熱応力特性は硬質ガラスほど優れていない。「軟質」ガラスは、より普及しているタイプのガラスであり、ガラス容器に一般的に使用される。コスト上の理由で、今日のガラス容器は、熔融ガラスを吹込み型の中でガラス容器へと成形することにより、主としてソーダ石灰ガラスで作製される。

【 0 0 0 5 】

ガラス容器は、3つの部分、すなわちバッチハウス、ホットエンド、およびコールドエンドを有する製造工程で作製される。バッチハウスは、ガラスの原料（一般に砂、ソーダ灰、石灰石、カレット（破碎されたりサイクルガラス）および他の原料を含む）が準備されてバッチへと混合される場所である。ホットエンドは炉から始まり、バッチ材料が炉の中で熔融ガラスへと溶解され、炉から熔融ガラス流が流れる。

【 0 0 0 6 】

熔融ガラスはゴブと称されるガラスの円筒に切断され、これが重力によってブランク型の中へ落下する。ブランク型では、金属プランジャを使用してガラスゴブをブランク型に押し込む、またはガラスゴブを下からブランク型の中へ吹き込むことにより、パリソンと称される前段階の容器が形成される。パリソンは、逆さにされて型に移され、そこで容器の形状へと吹込み成形される。ホットエンドは、不均一な冷却に起因する応力のために容器のガラスが脆弱になるのを防止する焼きなまし工程も含む。焼きなまし工程は、均一な冷却を達成するために、焼きなまし炉すなわちガラス焼きなまし炉を使用して容器を加熱し、次いで 20 から 60 分間にわたってゆっくりと冷却するのに用いられる。この焼きなまし工程は、例えば本特許出願の譲受人に譲渡された F u l l e r の米国特許第 3 , 4 6 3 , 4 6 5 号に説明されており、同特許は参照によって本明細書に組み込まれる。このようなガラス器のガラス焼きなまし炉は、一般的には互いに端と端を接続された複数のトンネル画定モジュールを有し、トンネルを通して延在する上側走路を有する循環式コンベヤを伴う。これらのモジュールのそれぞれが、コンベヤの上側走路の下の空気循環チャンバと、入口溝および出口溝を有するプレナムチャンバを画定する上部と、吸気開口を通して空気を引き込み、排気溝から前記コンベヤの上側走路を通して空気循環チャンバの中へ高速で放出する換気手段とを有する。

【 0 0 0 7 】

ガラス容器製造工程のコールドエンドにおける装置は、容器が合格品質であると確認するために容器を検査する。すべてのガラス容器が、一般にビリと称されるガラス中の小さなひび割れ、ストーンと称される異質包含物、プリスタと称されるガラス中の泡、および過度に薄い壁を含む様々な欠陥に関して、製造後に自動機械で検査される。供試体のガラス容器は、ガラス容器の強度および硬度などの特性を確認するために、一般的には破壊試験も受ける。

【 0 0 0 8 】

本特許出願の譲受人は、これらのガラス容器がまだ吹込み型の中にある間に、これらをホットエンドにおいて部分的に熱的強化するための工程を開発した。応力を除去するために、もっぱらガラス焼きなまし炉の中でのガラス容器の焼きなましに頼るのではなく、ガラス容器の壁の端から端まで意図的に導入された応力プロファイルを有する熱強化されたソーダ石灰ガラス容器を製作するために、ガラス容器の外壁および内壁の両方が、ガラス焼きなまし炉に移動するのに先立って、ホットエンドにおいて吹込み型の中で冷却される。

【 0 0 0 9 】

この工程は、最初に吹込み型の中で生じ、吹込み成形されたガラス容器の仕上げから吹込みヘッドがわずかに離され、ガラス容器の外部を冷却するために吹込み型の中の通路を通して冷却用空気を吹き付けるのと同時に、ガラス容器の内部を冷却するためにガラス容器の中で吹込み管が上下に振動される。次いで、形成されたガラス容器は、形成ステーションから口板冷却位置に移動され、ここでは、ガラス容器の外面を冷却するために、冷却囲い板または「缶」でガラス容器の外部を囲んでそこを通る冷却用空気を利用し、同時に、ガラス容器の内面を冷却するためにガラス容器の中に延在する振動冷却管が使用される。

10

【 0 0 1 0 】

この冷却工程により、ガラス容器の内壁および外壁の両方に圧縮応力が生じ、ガラス容器の壁の内部に引張り応力が生じる。そのために、ガラス容器の熱エネルギーは、ガラス容器がコンベヤ上に置かれる以前に、十分に焼きもどされる点まで低減され、したがってガラス容器に欠陥をもたらしことなくさらなる冷却を迅速に行なうことができる。次のコンベヤ冷却は、部分的に冷却されたガラス容器を従来型のガラス焼きなまし炉に供給するのに先立って冷却トンネルの中で遂行されてよい。

20

【 0 0 1 1 】

上記で参照された、改善された冷却技術を用いて製作される熱的に強化されたソーダ石灰ガラス容器は、実質的により強く、より耐久性があり、機械的な負荷もしくは取扱いまたは突然の温度変化の下でも、壊れる可能性が非常に低い。上記で簡潔に論じられた改善は、Mungovanらの米国特許第6,705,121号、Hyreらの米国特許第6,766,664号、Hyreらの米国特許第6,766,665号、Hyreらの米国特許第6,776,009号、Fentonの米国特許第6,766,010号、Fentonの米国特許第6,782,719号、Fentonの米国特許第6,807,826号、Anheyerらの米国特許第6,807,827号、Fentonらの米国特許第6,807,829号、Fentonらの米国特許第6,810,690号、Fentonの米国特許第6,813,905号、Fentonらの米国特許第6,823,696号、Pinkertonの米国特許第6,854,292号、Diehmらの米国特許第6,857,291号、Fentonの米国特許第6,857,292号、Fentonの米国特許第6,865,910号、Hyreらの米国特許第7,487,650号、およびHyreらの米国特許出願第11/890,056号でより詳細に説明されており、これらの特許および特許出願のすべてが本特許出願の譲受人に譲渡されており、すべてが参照によって本明細書に組み込まれる。

30

40

【 0 0 1 2 】

瓶詰め産業は、絶え間なくコスト削減に注目しており、この注目は、ガラス容器の重量軽減に対する強い要求を含んでいる。ガラス容器の重量を軽減すると、作製するのに必要な原料のコストが低下するのに加えて、ガラスを加熱するのに必要なエネルギー（および形成されたガラス容器から取り除かれなければならない熱量）も低減する。ガラス容器の重量がより軽ければ、輸送コストも削減することができ、空になったとき、再利用または廃棄する材料がより少なくなる。

【 0 0 1 3 】

元来のガラスは非常に強いものであるが、形成する工程の間に応力集中が導入される。望ましくない応力を除去するために寸法形状を大きくしてガラス容器の形状を最適化する

50

ことができるが、ガラス容器の重量をより軽くすれば、必然的に壁がより薄くなる。既知のガラス容器製造工程を用いて、より軽い重量ガラス容器が製作されるとき、必然的に、他のすべての要因が等しければ、より軽いガラス容器は、より重い（より厚い壁の）ガラス容器ほど強くない。

【発明の概要】

【発明が解決しようとする課題】

【0014】

したがって、本発明が、改善された工程によって製作されたガラス容器の強度の向上をもたらす、改善されたガラス容器製造工程を提供することが望ましい。ガラス容器の強度のこの向上が、あらゆる設計の寸法形状のガラス容器に対して得られることも望ましい。改善されたガラス容器製造工程が、従来型の軽くないガラス容器と少なくとも同一の強度を有する、より軽いガラス容器の作製を可能にすることがさらに望ましい。

10

【0015】

改善されたガラス容器製造工程が、既存のガラス容器製造ラインに適合可能であることがさらに望ましい。さらに、改善されたガラス容器製造工程が、ガラス容器製造ラインのホットエンドで既存のIS機の交換または再構成のいずれも必要としないことが望ましい。改善されたガラス容器製造工程で、ガラス容器の硬度特性の変更が、化学的強化方法を用いる必要性なしに達成されることも望ましい。

【0016】

改善されたガラス容器製造工程に使用される装置は、耐久性と長寿命の両方を備えた構造にする必要があり、また、その動作寿命を通じて、ユーザによる保守整備を、ほとんど、またはまったく不要にするべきである。また、この装置の市場訴求力を高めるために、この装置は、ガラス容器の製造において従来型のガラス容器製造に対する十分な利点を提供するべきであり、それによって、可能な限り広範な市場を得る。最後に、いかなる重要な相対的不都合も招くことなく前述の利点のすべてが達成されることも、目標の一つである。

20

【課題を解決するための手段】

【0017】

上記で論じられた背景技術の短所および制約は、本発明によって克服される。本発明により、ガラス容器を熱的に強化するための斬新な底面冷却器を有する装置は、製造後のガラス容器の熱的強化工程を、ガラス容器が、ガラス製造ラインのホットエンドで形成された後に（ホットエンドは、熔融ガラスのゴブからガラス容器を形成するIS機を含んでいる）、ガラス製造ラインのコールドエンドの前に遂行し、コールドエンドでは、完成したガラス容器が任意選択でコーティングされ、次いで検査される。本発明によって実行される製造後のガラス容器の熱的強化工程は、ガラス焼きなまし炉の中でガラス容器が従来の焼きなまし工程で徐々に冷却される従来型の焼きなまし動作に代わるものである。

30

【0018】

IS機で形成された500 から600 の温度のガラス容器は、おおよそ620 とおおよそ660 の間の均一な温度に加熱する特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉を通過して運ばれ、特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉を出る。特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉は、ガラス容器を通すときに加熱することを除けば、焼きなましのガラス焼きなまし炉に構造的に類似している。ガラス容器は、適切な圧縮応力を得るために、少なくともおおよそ620 でなければならず、また、より高温では変形する可能性があるので、おおよそ660 以下でなくてはならない。

40

【0019】

ガラス容器は、所望の温度範囲に加熱された後、ガラス容器のすべての領域を含む外面および内面がガラス容器に用いられるガラスの歪み点を下回る温度まで同時に冷却される、独特かつ急速な熱的強化の冷却工程を施される。好ましくは、ガラス容器は、この急速な熱的強化の冷却工程で、おおよそ400 とおおよそ450 の間の温度範囲に冷却される。

50

【 0 0 2 0 】

好ましい実施形態では、急速な熱的強化の冷却工程は、それぞれのガラス容器を、頂部および底部の両方が開かれている円筒状の冷却囲い板の中に配置することにより達成される。冷却囲い板の中に多数の小さな開口が配置されており、これを通して冷却用空気が吹き込まれて、冷却囲い板の内部にあるガラス容器の外表面を冷却する。任意選択で、冷却囲い板は、ガラス容器の外表面に向けられた冷却用空気のジェットを「吹きつける」ために回転され、かつ／または振動されてよい。各冷却囲い板の底部の近くに配置されたノズルが、冷却用空気を上方へ吹き込んで、冷却囲い板の内部に配置されたガラス容器の底面を冷却する。あるいは、各冷却囲い板の壁の近くでガラス容器の下に開いている円形の隙間から冷却用空気を吹き込む環状の底面冷却器が、冷却ノズルの代わりに使用されてもよい。底部にノズルを有する冷却管が、ガラス容器の中へ下降され、上下に振動されて、冷却囲い板の内部にあるガラス容器の内表面を冷却してよい。これらの冷却動作のすべてが同時に行なわれ、したがって、ガラス容器全体の温度が急速に下降される。

10

【 0 0 2 1 】

次いで、ガラス容器は、冷却囲い板から取り出され、次いで、ファンの配列または群の下にある、または隣接したコンベヤ上に配置され、製造ラインのコールドエンドに入るのに先立って必要に応じてさらに冷却されてよい。代わりに、ガラス容器をさらに冷却するために、ガラス焼きなまし炉の追加の部分が使用されてもよい。

【 0 0 2 2 】

代替実施形態では、ガラス容器は、ガラス容器製造ラインで、ホットエンドとコールドエンドの中間のコンベヤ上にある間に熱的に強化される。別の代替実施形態では、全体の製造工程を通して冷えている、焼きなまされて完成したガラス容器が、特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉の中で高温に再加熱されてよく、次いで、本発明によって実施される製造後のガラス容器の熱的強化工程をガラス容器に対して遂行してよい。業務上の理由で既存のガラス容器製造ラインを変更することができないとき、これは代替形態になり得る。

20

【 0 0 2 3 】

したがって、本発明が、この工程によって製作されたガラス容器の強度の向上をもたらす、製造後の熱的強化工程においてガラス容器を熱的に強化するための装置における底面冷却器を教示することが理解され得る。ガラス容器の強度のこの向上は、あらゆる設計の幾何学的形状のガラス容器に対して本発明によって実施される製造後のガラス容器の熱的強化工程によって得られる。製造後のガラス容器の熱的強化工程は、従来型の軽いガラス容器と少なくとも同一の強度を有する、より軽いガラス容器の製造を可能にする。

30

【 0 0 2 4 】

本発明によって実施される、製造後のガラス容器の熱的強化工程は、既存のガラス容器製造ラインのすべてではないにしても大部分に対して十分に適応可能である。さらに、製造後のガラス容器の熱的強化工程は、ガラス容器製造ラインのホットエンドで既存のIS機の交換または再構成のいずれかを必要とすることがない。製造後のガラス容器の熱的強化工程は、ガラス容器の硬度特性を変更するのに、化学的強化方法を用いる必要性なしにガラス容器を強化する。

40

【 0 0 2 5 】

本発明によって実施される製造後のガラス容器の熱的強化工程に使用される装置は、耐久性と長寿命の両方を備えた構造にする必要があり、また、その動作寿命を通じて、ユーザによる保守整備が、ほとんど、またはまったく不要なはずである。本発明によって実施される製造後のガラス容器の熱的強化工程によってもたらされる利点は、その市場訴求力を実質的に強化し、それによって、同容器に、可能な限り広範な市場を与える。最後に、本発明によって実施される製造後のガラス容器の熱的強化工程の前述の利点および目標のすべてが、いかなる重要な相対的不都合も招くことなく達成される。

【 0 0 2 6 】

本発明のこれらおよび他の利点は、図面を参照すると最もよく理解される。

50

【図面の簡単な説明】

【 0 0 2 7 】

【図 1】ガラス容器の側壁の厚さに対してプロットされた最適な応力放物線を表すグラフである。

【図 2】温度に対してプロットされた粘度を表すグラフである。

【図 3】本発明によって実施される、製造後のガラス容器の熱的強化工程を示す流れ図である。

【図 4】製造後のガラス容器の熱的強化法を施されようとしている再加熱されたガラス容器を示す概略断面図であり、ガラス容器の下には、円筒状の冷却囲い板および底面冷却ノズルが配置されており、ガラス容器の上には、下端にノズルを有する冷却管が配置されている。

10

【図 5】円筒状の冷却囲い板の内側で、冷却囲い板の中に配置された底面冷却ノズルの上に配置された図 4 のガラス容器を示す概略図であり、下端にノズルを有する冷却管が、ガラス容器の内側に配置されていて、製造後のガラス容器の熱的強化法を遂行する。

【図 6】円筒状の冷却囲い板の内側で、冷却囲い板の中に配置された底面冷却ノズルの上に配置された図 4 のガラス容器を示す概略図であり、下端にノズルを有する冷却管が、ガラス容器の内側に配置されていて、製造後のガラス容器の熱的強化法を遂行する。

【図 7】図 5 および図 6 に示された冷却囲い板を斜め上から見た等角図である。

【図 8】図 5 から図 7 に示された冷却囲い板の側面図である。

【図 9】図 5 から図 8 に示された冷却囲い板の上面図である。

20

【図 10】図 5 から図 9 に示された冷却囲い板の第 1 の断面図である。

【図 11】図 5 から図 10 に示された冷却囲い板の第 2 の断面図である。

【図 12】図 10 に示された冷却囲い板の一部分の拡大図である。

【図 13】図 5 および図 6 に示された管の冷却ノズルを斜め上から見た等角図である。

【図 14】図 5、図 6、および図 13 に示された管の冷却ノズルの上面図である。

【図 15】図 5、図 6、図 13、および図 14 に示された管の冷却ノズルの断面図である。

【図 16】図 5 および図 6 に示された底面冷却ノズルを斜め上から見た等角図である。

【図 17】図 5、図 6、および図 16 に示された底面冷却ノズルの上面図である。

【図 18】図 5、図 6、図 16、および図 17 に示された底面冷却ノズルの断面図である。

30

【図 19】製造後のガラス容器の熱的強化工程の冷却部分を遂行するための、製造後のガラス容器の熱的強化装置の分解等角図である。

【図 20】図 19 に示された製造後のガラス容器の熱的強化装置の側面図であり、再加熱されたガラス容器を製造後のガラス容器の熱的強化装置に供給するための供給コンベヤの遠位端ならびに製造後のガラス容器の熱的強化装置によって排出された熱的に強化されたガラス容器を運ぶための排出コンベヤの近位端も示す。

【図 21】再加熱されたガラス容器に施す、製造後のガラス容器を熱的に強化するのに用いられる熱的強化法の動作の順序を示す、製造後のガラス容器の熱的強化装置の一部分および供給 / 排出のコンベヤの終端の側断面図である。

40

【図 22】再加熱されたガラス容器に施す、製造後のガラス容器を熱的に強化するのに用いられる熱的強化法の動作の順序を示す、製造後のガラス容器の熱的強化装置の一部分および供給 / 排出のコンベヤの終端の側断面図である。

【図 23】再加熱されたガラス容器に施す、製造後のガラス容器を熱的に強化するのに用いられる熱的強化法の動作の順序を示す、製造後のガラス容器の熱的強化装置の一部分および供給 / 排出のコンベヤの終端の側断面図である。

【図 24】再加熱されたガラス容器に施す、製造後のガラス容器を熱的に強化するのに用いられる熱的強化法の動作の順序を示す、製造後のガラス容器の熱的強化装置の一部分および供給 / 排出のコンベヤの終端の側断面図である。

【図 25】再加熱されたガラス容器に施す、製造後のガラス容器を熱的に強化するのに用

50

いられる熱的強化法の動作の順序を示す、製造後のガラス容器の熱的強化装置の一部分および供給／排出のコンベヤの終端の側断面図である。

【図２６】再加熱されたガラス容器に施す、製造後のガラス容器を熱的に強化するのに用いられる熱的強化法の動作の順序を示す、製造後のガラス容器の熱的強化装置の一部分および供給／排出のコンベヤの終端の側断面図である。

【図２７】再加熱されたガラス容器に施す、製造後のガラス容器を熱的に強化するのに用いられる熱的強化法の動作の順序を示す、製造後のガラス容器の熱的強化装置の一部分および供給／排出のコンベヤの終端の側断面図である。

【図２８】再加熱されたガラス容器に施す、製造後のガラス容器を熱的に強化するのに用いられる熱的強化法の動作の順序を示す、製造後のガラス容器の熱的強化装置の一部分および供給／排出のコンベヤの終端の側断面図である。

10

【図２９】図１９に示された製造後のガラス容器の熱的強化装置の取出し用はさみ道具の稼動組立体の等角図である。

【図３０】図１９に示された製造後のガラス容器の熱的強化装置の冷却管の稼動組立体の平面図である。

【図３１】図１９および図２０に示された、本発明によって実施される製造後のガラス容器の熱的強化工程の冷却部分の、それぞれが２つの容器を冷却するための２つの冷却囲い板機構において、一方が上昇され、他方が下降されている様子を示す等角図である。

【図３２】冷却囲い板および底面冷却ノズルに冷却用空気を供給する伸縮機構を示す、図３１に示された冷却囲い板機構の部分切取り断面図である。

20

【図３３】冷却囲い板および底面冷却ノズルに冷却用空気を供給する伸縮機構を示す、図３１に示された冷却囲い板機構の部分切取り断面図である。

【図３４】冷却囲い板および底面冷却ノズルに冷却用空気を供給する伸縮機構を示す、図３１に示された冷却囲い板機構の部分切取り断面図である。

【図３５】冷却囲い板および底面冷却ノズルに冷却用空気を供給する伸縮機構を示す、図３１に示された冷却囲い板機構の部分切取り断面図である。

【図３６】再加熱されたガラス容器を図１９および図２０に示された冷却管の稼動組立体へ配送するための供給コンベヤが通って延在している、特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉を示す等角図である。

【図３７】冷却管の稼動組立体および口板と、排出コンベヤと、押込み機構と、図３６の反対側から見た特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉の一部分とを示す等角図である。

30

【図３８】図３６に示された冷却管の稼動組立体および特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉の一部分を示す上面図である。

【図３９】図５から図１１に示された冷却囲い板の底に取り付けるための代替実施形態の底面冷却器を斜め上から見た等角図である。

【図４０】図３９に示された代替実施形態の底面冷却器の上面図である。

【図４１】図３９および図４０に示された代替実施形態の底面冷却器の断面図である。

【図４２】図５から図１２に示された冷却囲い板の底部における図３９から図４１に示された代替実施形態の底面冷却器の断面図である。

【図４３】代替実施形態の製造後のガラス容器の熱的強化装置および方法の概略断面図であり、空気浸透性のコンベヤ上のいくつかのガラス容器の上に取り付けられた冷却囲い板および冷却管と、冷却囲い板および冷却管の下に配置され、概略的に描かれた底面冷却装置とを示す。

40

【図４４】図４３に示された代替実施形態の製造後のガラス容器の熱的強化装置および方法の概略断面図であり、空気浸透性のコンベヤ上のいくつかのガラス容器の上に下降された冷却囲い板および冷却管と、ガラス容器を冷却する、冷却囲い板および冷却管の下にガラス容器の下に配置された冷却装置とを示す。

【発明を実施するための形態】

【００２８】

本発明によって実施される、製造後のガラス容器の熱的強化または熱硬化の方法の例示

50

的实施形態について論じるのに先立って、本発明によって用いられる原理のいくつかの簡潔な議論が提供されることになる。ガラス容器の熱的強化は、ガラス容器の内面および外面を、内面および外面の温度がガラス遷移温度未満になるまで急速に冷却し、それによって、ガラス容器の表面構造を「凍りつかせる」一方で、内部のガラスは、その温度がガラス遷移温度に到達するまで流れ続けることを可能にし、次いでガラス容器を室温まで冷却する。ガラス容器が室温に達したとき、ガラス容器の内面および外面は圧縮状態にあり、ガラス容器の壁の内部は引張り状態にあるはずである。したがって、適切に制御された冷却工程では、ガラス容器の壁の厚さに沿った応力は、外壁における圧縮から、壁の内部で引張りとなり、内壁では圧縮へと変化するはずであって、半径方向の正味の応力は、極めて小さい、またはゼロである。

10

【0029】

図1は、ガラス容器の外壁における圧縮から、(壁の中間点を含む)壁の内部で引張りとなり、ガラス容器の内壁における圧縮へと、ガラス容器の壁の全体を通して変化する理想的な理論上の応力分布を表す応力放物線を示す。ガラスの端から端までの応力プロファイルは、理想的には放物線の形状であり、横軸の下の方と横軸の上の方とが等しく、表面の圧縮の合計が挟まれた部分の引張りと釣り合っており、総応力がゼロになる。理想的には、表面の圧縮区域の厚さは、一般に、それぞれの側でガラス壁の合計の厚さの21%であり、したがって42%が圧縮で58%が引張りとなる。最大の引張りレベルは、一般に、表面圧縮応力の半分である。

【0030】

20

ガラス容器の内面および外面に与えられる圧縮応力レベルは、通常は-20MPaと-60MPaの間の範囲である。焼きなまされたガラスに関する工業規格レベルは0MPa(±5MPa)であり、熱的に強化されたガラスについては-24MPaから-52MPaであり、強化ガラスについては-69MPaから-103MPaであって、安全ガラスについては-103MPaから-152MPaである。本発明によって実施される、製造後のガラス容器の熱的強化工程は、10から30MPaの内部引張り応力をもたらす20から60MPaの外側圧縮応力を有するガラス容器を製作することができる。

【0031】

ガラス容器の内面および外面にこのような圧縮応力レベルを有する均衡のとれた応力プロファイルを実現するためには、両方の表面を均一に冷却する必要がある。薄い区間では、内面および外面と中核の間で大きな温度差を得るのが難しいために、調節するのが最も困難である。薄い区間では、厚い領域より大きな伝熱係数が必要である。

30

【0032】

図2は、示された温度対粘度のグラフを有する一般的なガラス容器のいくつかの主要な温度依存特性を示す例示の温度対粘度のグラフを示す。ガラス容器は、十分に送風されて型から取り出された後も、一般におおよそ748である軟化点60より低い温度にとどまっていなければならない。ガラス容器のガラス材料は、高粘度液の範囲の特性62によって示された軟化点60より高い温度では、高粘度液である。ガラス容器は、成形工程に続いて、従来型のガラス焼きなまし炉の中で、ガラス容器のガラスが粘弾性の特性を示す、より広いガラスの粘弾性範囲66にあるガラス遷移の範囲64にわたって徐々に冷却することにより、焼きなまされる。ガラス遷移範囲64は、ガラス容器のガラスが、過冷却された液体から固体になる温度の範囲である。

40

【0033】

焼きなまし点68は、ガラス遷移範囲64の中に示され、ガラス容器の応力が、一般的には数分である選択された所定の期間で緩和される温度を表す。一般的なガラス容器については、焼きなまし点68の温度は、一般におおよそ555でよい。おおよそ550未満の温度では、ガラス容器の応力を緩和するのに、数分ではなく数時間かかることになる。選択された焼きなまし点68より高いガラス遷移範囲64の温度では、ガラス容器の応力を緩和するのにかかる時間がより短くなるはずである。ガラス容器の応力は、歪み点70未満の温度に冷却することによって固定され、歪み点70は、一般におおよそ532

50

であるが、ガラス容器を作製するのに用いられる特定のガラス配合成分次第で、おおよそ 480 まで下げることができる。これらの温度は、ガラス容器のより薄い領域より一般的にはゆっくりと冷える最も厚い領域についても守られなければならないことに留意されたい。

【0034】

次に図3を参照すると、本発明によって実施される製造後のガラス容器の熱的強化工程が、ホットエンド工程76とコールドエンド工程77の中間にある熱的強化工程75を示す流れ図に示されている。工程は、熔融ガラスを作るのに用いられる材料が炉の中で一緒に溶解される、ガラス材料を溶解するステップ78で始まる。熔融ガラスは、ゴブをブランク型に分配するステップ79で熔融ガラスがIS機のブランク型またはパリソン型に分配されることで始まるホットエンド工程76に供給される。パリソンは、ブランク型の中でパリソンを形成するステップ80で、パリソン型の中で形成される。

10

【0035】

パリソンを吹込み型の中の配置してガラス容器に送風するステップ81で、パリソンが、吹込み型の中に配置され、送風される。送風されたガラス容器は、最初に、吹込み型の中のガラス容器を冷却するステップ82で、型の中で軟化点未満に冷却され、ホットエンド工程76の作業はステップ82で終了する。次いで、高温のガラス容器は、ガラス容器をガラス焼きなまし炉のコンベヤに移動するステップ83で、ガラス焼きなまし炉コンベヤに移動され、従来の工程では、従来のガラス容器焼きなまし工程を構成する制御された加熱および冷却が、ここで始まることになる。しかし、図3に示されるように、高温のガラス容器は、代わりに、本発明によって実施される熱的強化工程75に施される。

20

【0036】

熱的強化工程75に入る高温のガラス容器（この時点では一般に500 から600 である）は、ガラス容器を特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉の中でより高温に再加熱するステップ84を最初に施される。特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉は、従来型のガラス焼きなまし炉より高温であり、例えば入口でおおよそ600 、出口でおおよそ715 に設定されてよい。本明細書に示された事例では、特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉の長さは16フィート（4.9m）でよく、4つの独立した温度制御区域を有してよい。

【0037】

特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉の中のガラス容器によって費やされる一般的な時間は、おおよそ2分30秒から3分30秒であり、ガラス容器は、おおよそ620 とおおよそ680 の間の温度に（しかし、常に軟化点温度未満に）加熱されることになる。この温度範囲が選択される理由は、ガラス容器がおおよそ620 より低い温度であると適切な圧縮応力を達成することができず、ガラス容器がおおよそ680 より高い温度であると変形する恐れがあるためである。

30

【0038】

特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉の中でガラス容器をより高い温度に再加熱するステップ84に続いて、再加熱されたガラス容器は、熱的強化の冷却工程85を施され、ガラス容器は、歪み点未満に、好ましくはおおよそ400 とおおよそ450 の間の範囲に冷却される。熱的強化の冷却工程85では、一般的にはより長い冷却時間を要するより厚い領域を含めて、ガラス容器のすべての領域を歪み点未満に冷却する必要がある。この冷却は、熱的強化の冷却工程85に含まれるステップの議論とともに、以下でより詳細に論じられることになる。

40

【0039】

熱的強化の冷却ステップ85に続いて、熱的強化工程75は、ガラス容器をさらに冷却するステップ86終了し、ステップ86で、ガラス容器の温度は、おおよそ100 からおおよそ150 に下げられる。ガラス容器をさらに冷却するステップ86は、ガラス容器が熱的強化工程75からコールドエンド工程77へ移動するときに熱的に強化されたガラス容器を運ぶコンベヤの上に配置されたファン配列を使用して達成されてよい。

50

【 0 0 4 0 】

代わりに、製造後のガラス容器の熱的強化工程が、特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉の中で、ガラス容器をより高い温度に再加熱するステップ 8 4 を遂行するのにガラス焼きなまし炉の第 1 区間が用いられる既存のガラス容器生産ラインと一体化される場合には、ガラス焼きなまし炉の残りの区間が、ガラス容器をさらに冷却するステップ 8 6 でガラス容器を冷却するのに用いられてよい。

【 0 0 4 1 】

別の代替形態は、熱的強化工程 7 5 を、ガラス容器の製造作業と完全に分離した作業として用いるもので、熱的強化工程 7 5 では、完成して十分に冷却されたガラス容器が、ガラス容器を特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉の中でより高い温度に再加熱するステップ 8 4 で再加熱されることになり、熱的強化の冷却ステップ 8 5 で強化され、次いで、ガラス容器をさらに冷却するステップ 8 6 で冷却される。

10

【 0 0 4 2 】

熱的強化工程 8 5 に戻って、この工程の好ましい実施形態は、図 3 に示されたステップで示される。ガラス容器を特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉の中でより高い温度に再加熱するステップ 8 4 において、特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉から来るガラス容器は、ガラス容器が取り上げられて冷却囲い板の上に持ち上げられるステップ 8 7 で、特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉から出て来るコンベヤベルトからはさみ道具で取り上げられ、冷却囲い板の上の位置に持ち上げられる。次に、冷却ノズルを有する冷却囲い板がガラス容器のまわりに上昇されるステップ 8 8 で、冷却ノズルを有する冷却囲い板がガラス容器を取り巻くように上昇され、冷却管がガラス容器の中へ下降されるステップ 8 9 で、冷却管がガラス容器の中へ下降される。

20

【 0 0 4 3 】

次いで、冷却用空気が冷却囲い板、冷却ノズル、および冷却管に供給されるステップ 9 0 で、冷却用空気が冷却囲い板、冷却ノズル、および冷却管に供給され、一方、冷却囲い板が回転され、冷却管が振動されるステップ 9 1 で、冷却囲い板が任意選択で回転され、冷却管が振動されて、ガラス容器の外表面および内面を同時に冷却する。ガラス容器の外表面の仕上げは、熱的強化の冷却ステップ 8 5 の全体にわたって、はさみ道具のはさみ道具挿入物がガラス容器を支持して、伝導的に冷却されることに留意されたい。ガラス容器は、ガラス容器の内面と外面の温度が同時に下降されるステップ 9 2 で、歪み点未満に、好ましくはおおよそ 4 0 0 とおおよそ 4 5 0 の間の範囲に冷却される。この工程が、商用製造作業に用いられることを可能にするために、冷却時間は比較的速くするべきであり、したがって、一般的なガラス容器については、おおよそ 1 5 秒未満からおおよそ 2 0 秒までにするべきである。一般的な冷却時間は、重量が 1 5 5 グラムから 2 8 4 グラムのガラス容器については、それぞれ、おおよそ 9 秒からおおよそ 1 2 . 5 秒であることが判明している。

30

【 0 0 4 4 】

ガラス容器が、歪みを設定するのに十分に冷却されたとき、冷却管が上昇されて冷却囲い板が下降されるステップ 9 3 で、冷却管が上昇され、冷却囲い板および冷却ノズルが下降される。次に、熱的に強化されたガラス容器は、ガラス容器が排出コンベヤベルトまで下降されるステップ 9 4 で、排出コンベヤベルトまで下降される。これで熱的強化の冷却ステップ 8 5 が終了して、次いでガラス容器は、前述の、ガラス容器をさらに冷却するステップ 8 6 に進む。

40

【 0 0 4 5 】

ガラス容器は、熱的強化工程 7 5 に続いて、コールドエンド工程 7 7 を適用するために、ガラス容器製造ラインのコールドエンド工程に供給されてよい。ガラス容器がコーティングされることになっている場合、ガラス容器の温度は、おおよそ 1 0 0 と 1 5 0 の間になければならない。ガラス容器は、コールドエンドコーティングのステップ 9 5 で、例えば滑らかな被覆を用いてコーティングされてよい。次いで、ガラス容器は、ガラス容器が検査領域に移動されるステップ 9 6 で、検査領域に運ばれて、ガラス容器を検査する

50

ステップ 97 で検査される（ガラス容器は、一般に、およそ 25 と 80 の間の低下された温度にある）。次いで、強化されたガラス容器が完成する最終ステップ 98 に示されるように、熱的に強化されたガラス容器が完成する。

【0046】

次に図 4 に移って、本発明によって実施される製造後のガラス容器の熱的強化工程の主要な構成要素のいくつかは、ガラス容器 100 とともに示されている。ガラス容器 100 は、ガラス容器 100 を再加熱した特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉（図示せず）からガラス容器 100 を取り出したはさみ道具 102 により、製造後のガラス容器熱的強化工程の全体にわたって支持される。図 4 では、ガラス容器 100 は、円筒状の冷却囲い板 104 の上に、また、冷却囲い板 104 の内部で頂部より底部の近くに配置された底面冷却ノズル 110 の上に、直接配置して示されている。遠位端に管ノズル 108 が配置されている冷却管 106 が、ガラス容器 100 の上に管ノズル 108 が配置されて示されている。冷却囲い板 104、底面冷却ノズル 110、冷却管 106、および管ノズル 108 のより詳細な説明が、図 7 から図 18 とともに以下で提供されることになる。

【0047】

次に図 5 および図 6 を参照して、製造後のガラス容器の熱的強化装置は、ガラス容器 100 の底面を冷却するように冷却用空気を供給するために、ガラス容器 100 の底面が底面冷却ノズル 110 上に配置されるように、ガラス容器 100 が完全に冷却囲い板 104 の中へ下降して示されている。冷却囲い板 104 の垂直の開口 112 が、冷却用空気の流れを、ガラス容器 100 の首および仕上げの上へ導き、角を成す開口 114 が、冷却用空気を、ガラス容器 100 の首の下部、肩部、および本体の上へ導く。冷却囲い板 104 は、垂直の開口 112 および角を成す開口 114 からの冷却用空気のジェットを「吹きつける」ために任意選択で回転されてよく、回転は連続的なものまたは振動的なものである。

【0048】

冷却囲い板 104 の孔パターン、冷却囲い板 104 の寸法（すなわち内径および外径）、開口 112 および 114 の数、開口 112 および 114 の直径、圧力設定、また、開口 112 および 114 が、半径方向である、かつ/または角を成すかどうかといったことのすべてが、ガラス容器 100 の外面上の圧縮応力プロファイルを調整することによってガラス容器 100 の強度を最適化するために変更され得る。このようにして、所望の要求性能が、耐破裂性、耐落下性、耐垂直荷重性、耐衝撃性、または耐熱衝撃性といった、いかなるタイプのものであろうと、強度が最大化され得る。冷却囲い板 104 に供給される冷却用空気の一般的な圧力は、およそ 7.5 kPa（75 ミリバール）からおよそ 15 kPa（150 ミリバール）でよい。

【0049】

冷却用空気は、冷却管 106 を通って管ノズル 108 にも供給され、管ノズル 108 は、冷却用空気をガラス容器 100 の内面に導く。冷却管 106 および管ノズル 108 は、図 5 に示されたガラス容器 100 の首の最下部に近い位置（またはガラス容器 100 の首におけるより高い位置から任意選択で）と、図 6 に示されたガラス容器 100 の底面に近い位置（または任意選択で、ガラス容器 100 におけるより高い位置またはわずかにより低い位置）の間で振動されてよい。冷却管 106 および管ノズル 108 は、1 つのガラス容器 100 当たりおよそ 6 回まで、2 つの位置の間で振動されてよく、または任意選択で、図 6 に示された位置へ 1 回だけ振動されてよい。振動の速度は一定でよく、あるいは動作距離の深さを通じて変化してよく、また、任意選択で、一時的に任意の位置で休止されてもよい。

【0050】

ガラス容器 100 の内部に冷却管 106 を突っ込むと、有利な空気流れのパターンを設定する。これらの流れパターンは、冷却管 106 の遠位端における管ノズル 108 の巧みに計画された寸法形状によって強化される。ガラス容器 100 に入る空気流およびガラス容器 100 から出る空気流を最大化するために、供給面積（冷却管 106 の内径）と排気面積（ガラス容器 100 の仕上げの内径と冷却管 106 の外径の差）の平衡を慎重に保た

なければならない。冷却管 106 の寸法は、このように求められてよい。

【0051】

冷却管 106 の位置、速度、動作距離、および圧力設定は、ガラス容器 100 の強度を最適化するために内面の圧縮応力プロファイルを調整することにより、すべて変更され得る。このようにして、所望の要求性能が、耐破裂性、耐落下性、耐垂直荷重性、耐衝撃性、または耐熱衝撃性といった、いかなるタイプのものであろうと、強度が、最大化され得る、または、瓶の寸法形状の問題点（例えば難易度が高い形状、壁の厚さの変動）を補償するために調節され得る。管ノズル 108 に供給される一般的な冷却用空気圧力は、おおよそ $0.27 \text{ MPa} \pm 0.07 \text{ MPa}$ （2.7 パール ± 0.7 パール）でよく、冷却管 106 および管ノズル 108 の動作距離は、おおよそ 180 mm 以内でよい。

10

【0052】

底面冷却ノズル 110 の設計も、ガラス容器 100 の強度の最適化を容易にするように変更されてよい。底面冷却ノズル 110 は、ガラス容器 100 の外側底面を冷却するように配置される。底面冷却ノズル 110 に供給される一般的な冷却用空気圧力は、おおよそ 0.07 MPa （0.7 パール）でよい。

【0053】

次に、図 4 から図 6 に加えて図 7 から図 12 を参照すると、冷却囲い板 104 は、頂部端と底部端の両方で開かれており、その側壁には複数の垂直の開口 112 および角を成す開口 114 が配置されており、それぞれの直径がおおよそ 2 mm であり得ることが理解されよう。したがって、冷却囲い板 104 は、ガラス容器 100 の底面の他に、ガラス容器 100 の外面を冷却するように機能する。冷却囲い板 104 の外側では、冷却囲い板 104 の外面と図 7 から図 12 には示されていない囲い部材との間に形成された環状の空洞に空気圧力が供給されることになる。

20

【0054】

冷却囲い板 104 は、ガラス容器 100 の外面を均一に覆うために、側壁において小さな孔パターン（例えば垂直の開口 112 および角を成す開口 114 が、それぞれおおよそ 18 組）を用いる。冷却囲い板 104 の側壁における多数の角を成す開口 114 は、例えば下方へおおよそ 45 度の角を成すことが、図 6 および図 10 で最もよく理解されるであろう。これらの角を成す開口 114 は、ガラス容器 100 の肩部および側壁を冷却することになる。角を成す開口 114 の上には垂直の開口 112 が多数配置されており、これらがガラス容器 100 の首および仕上げの外側を冷却することになる。

30

【0055】

角を成す開口 114 および垂直の開口 112 の空気圧力は、好ましくは個々の環状部で測定されたとき、おおよそ 7.5 kPa （75 ミリパール）から 30 kPa （300 ミリパール）（76 cm から 304 cm（30 から 120 インチ）の水）である。ガラス容器 100 の外面を均一に覆うために、多数の角を成す小さな開口 114 および垂直の開口 112 が用いられる。その上に、冷却囲い板 104 は、回転振動され、また、ガラス容器 100 上の冷却パターンを平滑化するために、回転の代わりに、またはその回転に加えて軸方向に振動されてもよい。

【0056】

40

次に、図 4 および図 5 に加えて図 13 から図 15 を参照すると、管ノズル 108 は、冷却管 106 の終端の内部の中に適合する環状の上部 120 と、冷却管 106 の底面に接する環状の下部 122 とを有することが理解されよう。環状の下部 122 の下には、外側に広がる円錐台の部分 124 が配置されており、これは、垂直からの角度がおおよそ 30 度でよく、例えばその最大の直径がおおよそ 12 mm でよい。例えば直径がおおよそ 4 mm であり得る、中央に配置された開口 126 は、環状の上部 120、環状の下部 122、および円錐台の部分 124 を通って延在する。例えば直径がおおよそ 2.3 mm であり得る、半径方向に離隔された 8 つの縦方向の開口 128 が、環状の上部 120 および環状の下部 122 を通って延在する。

【0057】

50

冷却管 106 は、330 ミリリットルの 1 回限りのビール容器タイプの仕上げに対して用いられるとき、一般におおよそ 12 ミリメートルの外径およびおおよそ 10 ミリメートルの内径を有し、アイスティーまたはジュースに一般に用いられるサイズの 500 ミリリットルのガラス容器に対して用いられるときには、おおよそ 19.05 ミリメートルの外径およびおおよそ 16.56 ミリメートルの内径を有してもよい。冷却管 106 およびノズル 108 は、どちらも、製造後のガラス容器の熱的強化装置に設置されながら、容易に、かつ迅速に交換可能である。冷却管 106 は、直線の垂直位置に取り付けられて、ガラス容器 100 の中へ下降され得る。

【0058】

空気圧力が、冷却管 106 を通ってノズル 108 に供給され、中央に配置された開口 126 および縦方向の開口 128 を通ってノズル 108 を出る。冷却管 106 に供給する空気圧力は、好ましくはおおよそ $0.2 \text{ MPa} \pm 0.07 \text{ MPa}$ ($2.0 \text{ バール} \pm 0.7 \text{ バール}$) ($30 \text{ psi} \pm 10 \text{ psi}$) である。中央に配置された開口 126 を通ってノズル 108 を出る冷却用空気は、ガラス容器 100 の内部を底面で冷却し、一方、縦方向の開口 128 を通ってノズル 108 を出る冷却用空気は、分散され、円錐台の部分 124 によって半径方向で外側へ導かれる。冷却管 106 を上下に振動させることにより、ガラス容器 100 の内面の全長が冷却され得る。好ましい実施形態では、ノズル 108 は、一般的な首長ビール容器に対して、おおよそ 180 ミリメートルの動作距離で上下動を繰り返され得る。冷却管 106 によってノズル 108 を通って供給された冷却用空気は、ガラス容器 100 の仕上げを通してガラス容器 100 を出る。

【0059】

次に、図 4 から図 6 に加えて図 16 から図 18 を参照すると、底面冷却ノズル 110 が、冷却囲い板 104 の中で、底面近くの静止位置に同軸に取り付けられていることが理解されよう。底面冷却ノズル 110 の位置は、冷却囲い板 104 内に様々な寸法の瓶を収容するための高さに調節可能である。これらの図には示されていない管路によって、底面冷却ノズル 110 の底部にあるチャンバ 130 に冷却用空気が供給される。底面冷却ノズル 110 は、中央に配置して上方へ配向された開口 132 を有し、開口 132 は、半径方向に離隔された 6 つの角を成す開口 134 によって囲まれており、開口 134 の角度は、例えば垂直からおおよそ 30 度であり、底面冷却ノズル 110 の頂部は、円錐台であって垂直からおおよそ 60 度の角度で傾斜されている。中央に配置された開口 132 および角を成す開口 134 は、直径が例えばおおよそ 3.2 mm でよい。

【0060】

冷却用空気が、底面冷却ノズル 110 のチャンバ 130 に供給され、次いで、中央に配置された開口 132 および 6 つの半径方向に離隔されて角を成す開口 134 を通って底面冷却ノズル 110 を出る。底面冷却ノズル 110 に供給される空気圧は、好ましくはおおよそ 0.034 MPa (0.34 バール) から 0.069 MPa (0.69 バール) ($5 \text{ から } 10 \text{ psi}$) である。中央に配置された開口 132 および 6 つの半径方向に離隔された角を成す開口 134 の吹付けパターンは、ガラス容器 100 の底面をカバーする。底面冷却ノズル 110 によって供給された冷却用空気は、冷却囲い板 104 の底で冷却囲い板 104 を出る。冷却工程中に粉々になる可能性がある割れたガラスは、冷却囲い板 104 から明白に落下するための経路を有する必要があるため、底面冷却ノズル 110 は、割れたガラスの捕獲ポイントにならないように設計しなければならない。

【0061】

好ましくは、ガラス容器 100 を保持するはさみ道具 102 (図 4 から図 6 に示されている) は、ガラス容器 100 が冷却囲い板 104 に配置されている間に揺れるのを防止するために、ガラス容器 100 を十分に強く握る必要がある。あるいは、ガラス容器 100 が揺れるのを防止するために、図には示されていないが、冷却囲い板 104 の内側に複数の整列ピンが配置されているのが望ましいであろう。整列ピンは、高温に耐えることができ、ガラス容器 100 のガラスにピリをもたらない材料で作製されることになる。また、整列ピンは、容易に交換可能でなければならない。冷却囲い板 102 の回転のために

整列ピンとガラス容器 100 の間にこする動作があり得るので、整列ピンは間隙を伴って設計されるべきである。

【0062】

次に、図 19 を参照すると、本発明によって使用される、製造後のガラス容器の熱的強化装置の主要な部品が示されている。図面に示された熱的強化装置はかなり複雑に見えるが、8つの半組立部品から成る組立体と考えられると、比較的より簡単である。これらの半組立部品のうちの4つがガラス容器を移動するように機能し、半組立部品のうちの1つがガラス容器の外側を冷却するように機能し、半組立部品のうちの1つがガラス容器の内部を冷却する半組立部品を支持するように機能し、最後の半組立部品がガラス容器の内部を冷却するように機能する。

10

【0063】

ガラス容器を移動させるように機能する第1の半組立部品は、製造後のガラス容器の熱的強化装置が配置される床に配置された支持部材 140 であり、支持部材 140 は、ベース部材 146 の両端の近くで上方へ延びるように取り付けられた2つの直立した駆動装置カバー 142 および 144 と、直立した駆動装置カバー 142 と 144 の間に配置された作動機構カバー 145 とを有する。ガラス容器を移動させるように機能する第2の半組立部品は、直立した駆動装置カバー 142 に隣接して取り付けられる、はさみ道具のアーム支持装置 148 であり、支持部材 140 のベース部材 146 によって支持され、ガラス容器を移動させるように機能する第3の半組立部品は、直立した駆動装置カバー 144 に隣接して取り付けられる、第2のはさみ道具のアーム支持装置 150 であり、支持部材 140 のベース部材 146 によって支持される。

20

【0064】

はさみ道具のアーム支持装置 148 は、はさみ道具駆動アーム 154 を支持する支柱 152 を有し、駆動アーム 154 の近位端が支柱 152 の頂部に取り付けられている。はさみ道具駆動装置のアーム 154 の遠位端には、はさみ道具のアーム取付け部材 156 が配置されている。同様に、はさみ道具のアーム支持装置 150 は、はさみ道具駆動アーム 160 を支持する支柱 158 を有し、駆動アーム 160 の近位端が支柱 158 の頂部に取り付けられている。はさみ道具駆動装置のアーム 160 の遠位端には、はさみ道具のアーム取付け部材 162 が配置されている。

【0065】

30

ガラス容器を移動させるように機能する第4の半組立部品は、はさみ道具支持部材 166 であって、一端をはさみ道具の駆動アーム 154 のはさみ道具のアーム取付け部材 156 に取り付けられ、他端をはさみ道具の駆動アーム 160 のはさみ道具のアーム取付け部材に 162 に取り付けられた、はさみ道具のバー 164 を有する。4組のはさみ道具の操作器具 168 は、はさみ道具のバー 164 によって支持され、はさみ道具の操作器具 168 の各組が、1対のはさみ道具 102 を支持している（図 19 ではこれらの対のうち1つの一部分しか見えない）。はさみ道具のアーム支持装置 148 および 150 は、はさみ道具支持部材 166 をおおよそ 180 度の円弧で駆動するように機能し、これが、ガラス容器 100 を再加熱する特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉（図 19 には示されていない）を出るコンベアからガラス容器 100 を取り上げることになり、ガラス容器 100 を、本発明によって用いられる、製造後のガラス容器の熱的強化法が遂行される位置へ移動させて、最後に、ガラス容器 100 を、製造後のガラス容器の熱的強化装置からガラス容器 100 を取り出すコンベアへ移動させる。

40

【0066】

はさみ道具のアーム支持装置 148 とはさみ道具のアーム支持装置 150 は、一緒に動作するように構成して配置され、はさみ道具支持部材 166 のはさみ道具のバー 164 を、支持部材 140 のベース部材 146 と支持部材 140 が取り付けられた表面とに対して平行に保つ。はさみ道具のアーム支持装置 148 および 150 が、はさみ道具支持部材 166、はさみ道具の操作器具 168、およびはさみ道具 102 を、おおよそ 180 度の円弧で駆動するとき、はさみ道具 102 は、すべて、はさみ道具 102 によって搬送される

50

ガラス容器 100 が、はさみ道具のアーム支持装置 148 および 150 と、はさみ道具支持部材 166 と、はさみ道具の操作器具 168 と、はさみ道具 102 との角度位置に関係なく、はさみ道具の操作器具 168 の直下に保持されることになるように、垂直位置において保たれる。

【0067】

ガラス容器の外側を冷却するように機能する半組立部品は、直立した駆動装置カバー 142 と直立した駆動装置カバー 144 の中間の位置で支持部材 140 のベース部材 146 上に取り付けられた冷却囲い板機構 170 である。冷却囲い板機構 170 は、製造後のガラス容器の熱的強化装置が配置される床の上に、はさみ道具のアーム支持装置 148 と 150 の間で隣り合って配置される 2 つの囲い板機構の半組立部品 172 および 174 を有し、2 つの囲い板機構の半組立部品 172 および 174 のそれぞれの中には、2 つの冷却囲い板 104 (および図 19 には示されていないが、その中に含まれる 2 つの底面冷却ノズル 110) が含まれている。冷却囲い板機構 170 は、冷却囲い板 104 および底面冷却ノズル 110 を動作させるための装置も含む。

10

【0068】

囲い板機構の半組立部品 172 および 174 は、図 19 で囲い板機構の半組立部品 172 に関して示された、それらが下降される第 1 の引っ込んだ位置と、図 19 で囲い板機構の半組立部品 174 に関して示された、それらが上昇される第 2 の延びた位置とを有する。はさみ道具支持部材 166 およびはさみ道具 102 は、下降された位置では、ガラス容器を、熱的焼き戻しのための位置へ、または熱的焼き戻しの後に冷却位置から遠方へと、自由に移動させることができる。上昇された位置では、はさみ道具のアーム支持装置 148 および 150 が熱的焼き戻し用の位置にある状態で、はさみ道具支持部材 166 上のはさみ道具 102 によって支持されたガラス容器は、熱的焼き戻しのために、冷却囲い板 104 の中に、囲い板機構の半組立部品 172 および 174 の中に配置された底面冷却ノズル 110 の上に含まれることになる。

20

【0069】

囲い板機構の半組立部品 174 が上方へ延びた位置に示され、囲い板機構の半組立部品 172 が下方へ引っ込んだ位置に示されているが、動作では、囲い板機構の半組立部品 172 および 174 は、下方へ引っ込んだ位置と上方へ延びた位置の間で互いに移動することが理解されよう。冷却囲い板機構 170 の他の態様が、以下で図 31 から図 35 の議論とともに論じられることになる。

30

【0070】

ガラス容器の内部を冷却する半組立部品を支持するように機能する半組立部品は、2 つの支持アーム 178 および 180 を有する冷却管支持組立体 176 であり、支持アーム 178 の下端が、はさみ道具のアーム支持装置 148 の支柱 152 上に取り付けられ、支持アーム 180 の下端が、はさみ道具のアーム支持装置 150 の支柱 158 上に取り付けられている。支持アーム 178 および 180 は、上方へ、冷却囲い板機構 170 の上に延在し、その間には、それぞれの上端に取り付けられて冷却囲い板機構 170 の上に延在する、冷却管組立体の支持ブリッジ 182 がある。冷却管組立体の支持ブリッジ 182 ならびに支持アーム 178 および 180 は、固定位置に取り付けられ、はさみ道具のアーム支持装置 148 および 150 が、はさみ道具支持部材 166 をおおよそ 180 度の円弧で駆動するのを可能にするように構成して配置される。

40

【0071】

最後に、ガラス容器の内部を冷却するように機能する半組立部品は、囲い板機構の半組立部品 172 および 174 の上の冷却管組立体の支持ブリッジ 182 上に取り付けられた冷却管組立体 184 である。冷却管組立体 184 は、それぞれの底面に管ノズル 108 が配置されている 4 つの冷却管 106 を支持する。冷却管組立体 184 は、冷却管支持組立体 176 の冷却管組立体支持ブリッジ 182 上に取り付けられたベース板 186 を有する。

【0072】

50

2つの支持レール188および190が、ベース板186のそれぞれの終端から上方へ垂直に延在する。支持レール188の上端と支持レール190の間に、支持板192が取り付けられる。クロスバー194が、支持レール188および190の上に摺動自在に取り付けられ、モータ198によって作動されるねじ機構196によって支持板192とベース板186の間で垂直方向に駆動される。

【0073】

4つの管支持スリーブ200（図19には2つしか示されていない）が、クロスバー194から下方へ、離隔されて延在しており、それぞれが冷却管106（図19には2つしか示されていない）を支持する。冷却管組立体184は、それぞれの冷却管106が冷却

10

囲い板機構170の囲い板機構の半組立部品172および174の冷却囲い板104の上

にあってこれと共軸になるように、構成して配置される。冷却用空気は、冷却管106のそれぞれに供給されるように、冷却管組立体184に供給されてよい。

【0074】

冷却管組立体184は、冷却管106を、第1の上昇された位置と第2の下降された位置の間で駆動するように動作可能である。はさみ道具支持部材166およびはさみ道具102は、上昇された位置では、ガラス容器100を、熱的強化の位置へ、または熱的焼き

20

戻しが完了した後に熱的焼き戻しの位置から、自由に移動させることができ、冷却管組立体184が上昇された位置にあるとき、冷却管106の下端およびノズル108は、はさみ道具支持部材166およびはさみ道具102上に配置される。冷却管106の下端およびノズル108のそれぞれが、下降された位置では、熱的焼き戻しのためにはさみ道具支持部材166およびはさみ道具102によって支持されているガラス容器100の中に深く配置されることになる。

【0075】

次に図20を参照すると、本発明によって使用される製造後のガラス容器の熱的強化装置が、再加熱されたガラス容器100の供給源と、製造後のガラス容器の熱的強化装置を出た熱的に強化されたガラス容器100が向かう装置とともに示されている。製造後のガラス容器の熱的強化装置は、ガラス容器100を、ガラス容器100が再加熱された後に供給源コンベア210から取り上げられる第1の位置と、ガラス容器100が熱的に冷却される第2の位置と、ガラス容器100が口板212上に置かれる第3の位置との間で移動させることになる。本明細書に説明されたこの例示的实施形態では、はさみ道具支持部材166に4組のはさみ道具102が取り付けられて、はさみ道具102のそれぞれが1つのガラス容器100を取り上げて移動させるように使用され得るが、代わりに、はさみ道具102の組の任意数が使用されてよいことが理解されよう。

30

【0076】

供給源コンベア210が、再加熱されたガラス容器100を製造後のガラス容器の熱的強化装置に供給し、はさみ道具駆動アーム154のはさみ道具102が、ガラス容器100を取り上げ、はさみ道具のアーム支持装置148および150（図20には後者が示されていない）を回転させて円弧状に移動する。再加熱されたガラス容器100は、熱的に強化される位置へ、左回りの円弧でおおよそ90度移動される。

【0077】

熱的に強化されたガラス容器100は、はさみ道具のアーム支持装置148および150の回転によって左回りの円弧でさらにおおよそ90度移動され続け、そこで、はさみ道具102によって口板212上に置かれる。熱的に強化されたガラス容器100は、はさみ道具102が上昇した後に、押し機構216によって搬出コンベア214上に押される。次いで、熱的に強化されたガラス容器100は、製造後のガラス容器の熱的強化装置から離されてよく、任意選択でファンまたは後段の冷却装置（図20には示されていない）によってさらに冷却されてよい。

40

【0078】

次に図21から図28を参照すると、製造後のガラス容器の熱的強化法のまとまった順序が示される。これらの図は、すべて、製造後のガラス容器の熱的強化装置の中心線に沿

50

った断面として示されている。図 2 1 では、再加熱されたガラス容器 1 0 0 が、製造後のガラス容器の熱的強化装置に隣接した特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉 2 2 0 を供給源コンベア 2 1 0 に載って出る様子が示されている。ガラス容器 1 0 0 が特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉 2 2 0 に入るまでに冷えるのを最小限にするために、特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉 2 2 0 は、好ましくは IS 機（図 2 1 から図 2 8 には示されていない）のすぐ下流にできるだけ接近して配置される。はさみ道具支持部材 1 6 6 は、右回りの円弧に回転されており、はさみ道具 1 0 2 が、再加熱されたガラス容器 1 0 0 のすぐ上に示されている。はさみ道具支持部材 1 6 6 は、はさみ道具駆動アーム 1 6 0 がほぼ水平になるまで右回りに回転し続けて、水平になったとき、はさみ道具 1 0 2 が、再加熱されたガラス容器 1 0 0 の仕上げをつかむことになり、はさみ道具 1 0 2 のそのときの位置が想像線で示されている。

10

【 0 0 7 9 】

はさみ道具 1 0 2 が、再加熱されたガラス容器 1 0 0 の仕上げをつかんだ後、はさみ道具支持部材 1 6 6 が左回りの円弧で回転し始めることになり、再加熱されたガラス容器 1 0 0 を供給コンベア 2 1 0 から持ち上げたはさみ道具 1 0 2 が、図 2 2 に示されるように左回りの円弧で回転する。はさみ道具支持部材 1 6 6 は、はさみ道具 1 0 2 とともに、はさみ道具支持部材 1 6 6 が垂直になるまで左回りの円弧で回転し続けることになり、垂直になった位置で、再加熱されたガラス容器 1 0 0 が、図 2 3 に示されるように、冷却囲い板 1 0 4 の上に、かつ冷却管 1 0 6 および管ノズル 1 0 8 の下に配置される。

【 0 0 8 0 】

20

図 2 4 に示されるように、冷却囲い板 1 0 4 は、再加熱されたガラス容器 1 0 0 を囲むために、冷却囲い板機構 1 7 0 の囲い板機構の半組立部品 1 7 4 によって上昇されることになり、再加熱されたガラス容器 1 0 0 の底面の直下に底面冷却ノズル 1 1 0 が配置され、冷却管 1 0 6 および管ノズル 1 0 8 は、管ノズル 1 0 8 が再加熱されたガラス容器 1 0 0 の首に来るまで、冷却管組立体 1 8 4 によって下降されることになる。この時点で、1 つまたは複数の冷却用空気の供給源によって、冷却用空気が、冷却囲い板 1 0 4 と、冷却管 1 0 6 および管ノズル 1 0 8 と、底面冷却ノズル 1 1 0 とに供給されることになる。

【 0 0 8 1 】

冷却囲い板 1 0 4 は、任意選択で、再加熱されたガラス容器 1 0 0 を冷却するために、垂直の開口 1 1 2 および角を成す開口 1 1 4（どちらも図 5 および図 6 に示されている）から入ってくる冷却用空気を、ガラス容器 1 0 0 の外面に吹き付けるように、回転され、かつ/または上下に振動されてよい。同時に、底面冷却ノズル 1 1 0 が、再加熱されたガラス容器 1 0 0 を冷却するために、その底面に冷却用空気を導くことになる。また、冷却管 1 0 6 および管ノズル 1 0 8 は、同時に、再加熱されたガラス容器 1 0 0 の内面を冷却するために、図 2 4 に示された高い位置と図 2 5 に示された低い位置の間で振動されることになる。前述のように、冷却管 1 0 6 および管ノズル 1 0 8 は、1 回とおおよそ 6 回の間で振動されてよい。

30

【 0 0 8 2 】

この時点で、ガラス容器 1 0 0 の表面は、急速に、かつ均一に冷却されて、ガラスの端から端まで温度プロファイルを設定し、このことにより、ガラスのすべてが、一旦、歪み点未満に、好ましくはおおよそ 4 0 0 とおおよそ 4 5 0 の間の範囲に冷却されると、恒久的な応力プロファイルをもたらす。一般的にはより長い冷却時間を要する、より厚い領域の中間を含む、ガラス容器 1 0 0 のすべての領域が歪み点未満に冷却されるので、ガラス容器 1 0 0 の全体を通しての応力プロファイルが、ガラス容器の外壁における圧縮から、壁の内部で引張りとなり、ガラス容器の内壁における圧縮へと変化する、ガラス容器 1 0 0 の壁の全体を通しての理想的な理論上の応力分布に近づくことになる。これによって、ガラス容器 1 0 0 がより強くなり、壁がより薄く、より軽い、それでもなお優れた強度特性を有するガラス容器の製造も可能になる。

40

【 0 0 8 3 】

図 2 4 および図 2 6 に示された、製造後のガラス容器の熱的強化法の遂行に続いて、冷

50

却囲い板 1 0 4 および底面冷却ノズル 1 1 0 が、熱的に強化されたガラス容器 1 0 0 の下の位置に、冷却囲い板機構 1 7 0 の囲い板機構の半組立部品 1 7 4 によって下降されることになり、冷却管 1 0 6 および管ノズル 1 0 8 は、図 2 6 に示されるように管ノズル 1 0 8 が熱的に強化されたガラス容器 1 0 0 の首の上に来るまで、冷却管組立体 1 8 4 によって上昇されることになる。

【 0 0 8 4 】

次いで、はさみ道具支持部材 1 6 6 は、左回りの円弧で回転されることになり、はさみ道具 1 0 2 が、熱的に強化されたガラス容器 1 0 0 を、図 2 7 に示されるように、その底面が口板 2 1 2 上に載るところへ運ぶ。この時点で、はさみ道具駆動アーム 1 6 0 がおよそ水平になり、はさみ道具 1 0 2 が、熱的に強化されたガラス容器 1 0 0 の仕上げを放し、右回りに回転し始めて、熱的に強化されたガラス容器 1 0 0 を口板 2 1 2 上に残すことになる。はさみ道具駆動アーム 1 6 0 が右回りに回転し続けると、押し機構 2 1 6 が、図 2 8 に示されるように、熱的に強化されたガラス容器 1 0 0 を、排出コンベア 2 1 4 の上に押し進めることになる。

10

【 0 0 8 5 】

次に図 2 9 を参照すると、はさみ道具のアーム支持装置 1 4 8 および 1 5 0 の支持部材 1 4 0 上への設置、およびはさみ道具支持部材 1 6 6 のはさみ道具駆動アーム 1 5 4 および 1 6 0 上への設置が示されている。明確にするために、作動機構のカバー 1 4 5 ならびに直立した駆動装置のカバー 1 4 2 および 1 4 4 (それらのすべてが図 1 9 に示されている)の両方が除去されて、支持部材 1 4 0 が示されている。はさみ道具のアーム支持装置 1 4 8 の支柱 1 5 2 がベース部材 1 4 6 の一端に取り付けられ、はさみ道具のアーム支持装置 1 5 0 の支柱 1 5 8 がベース部材 1 4 6 の他端に取り付けられる。はさみ道具のアーム支持装置 1 4 8 のはさみ道具駆動アーム 1 5 4 は、支柱 1 5 2 の上端で回転するように支持され、はさみ道具のアーム支持装置 1 5 0 のはさみ道具駆動アーム 1 6 0 は、支柱 1 5 8 の上端で支持される。

20

【 0 0 8 6 】

その中心で支持部材 1 4 0 のベース部材 1 4 6 に取り付けられた駆動モータ 2 3 0 が、両端に歯付きプーリー 2 3 4 および 2 3 6 が取り付けられた、4つの軸受け支持部材 2 3 8 によって回転するように支持されている駆動軸 2 3 2 を回転させるように動作する。歯付きプーリー 2 3 4 が、はさみ道具駆動アーム 1 5 4 を回転させる歯付きプーリー 2 4 0 を、歯付きベルト 2 4 2 を介して駆動する。歯付きプーリー 2 3 6 が、はさみ道具駆動アーム 1 6 0 を回転させる歯付きプーリー 2 4 4 を、歯付きベルト 2 4 6 を介して駆動する。はさみ道具を支持する回転部材が、参照数字 2 4 8 によって全体的に示されており、はさみ道具駆動アーム 1 5 4 上に配置されて、はさみ道具駆動アーム 1 5 4 と一緒に動き、はさみ道具を支持する回転部材が、参照数字 2 5 0 によって全体的に示されており、はさみ道具駆動アーム 1 6 0 上に配置されて、はさみ道具駆動アーム 1 6 0 と一緒に動く。

30

【 0 0 8 7 】

はさみ道具を支持する回転部材 2 4 8 および 2 5 0 は、はさみ道具駆動アーム 1 5 4 および 1 6 0 が図 2 1 から図 2 8 とともに説明されたような円弧ではさみ道具支持部材 1 6 6 を駆動するとき、はさみ道具支持部材 1 6 6 を、その垂直方向において保つように動作する。はさみ道具のアーム支持装置 1 4 8 の支柱 1 5 2 の外側には、支持ブラケット 2 5 2 が取り付けられており、はさみ道具のアーム支持装置 1 5 0 の支柱 1 5 8 の外側には、支持ブラケット 2 5 4 が取り付けられている。支持ブラケット 2 5 2 および 2 5 4 は、冷却管支持組立体 1 7 6 および冷却管組立体 1 8 4 (どちらも図 1 9 に示されている)を支持することになる。

40

【 0 0 8 8 】

次に図 3 0 を参照すると、クロスバー 1 9 4 が、支持板 1 9 2 とベース板 1 8 6 の間で垂直に動くように、支持レール 1 8 8 および 1 9 0 上に取り付けられる。クロスバー 1 9 4 は、クロスバー 1 9 4 のねじ切りされた開口 2 6 0 を通って延在するねじ機構 1 9 6 を駆動するモータ 1 9 8 によって駆動される。管支持スリーブ 2 0 0 のうちの 2 つが、管支

50

持板 2 6 2 上に取り付けられ、他の 2 つの管支持スリーブ 2 0 0 が、管支持板 2 6 4 上に取り付けられる。2 つの管支持板 2 6 2 および 2 6 4 は、クロスバー 1 9 4 上に取り付けられる。

【 0 0 8 9 】

次に図 3 1 を参照すると、囲い板機構の半組立部品 1 7 2 の一部分および囲い板機構の半組立部品 1 7 4 の一部分が示されており、やはり、囲い板機構の半組立部品 1 7 2 が、下降された位置、すなわち不活性の位置にあって、囲い板機構の半組立部品 1 7 4 が、上昇された位置、すなわち冷却位置にある（しかし、動作では、囲い板機構の半組立部品 1 7 2 および 1 7 4 の両方が、通常、同一の位置で一緒に動作する）。囲い板機構の半組立部品 1 7 2 および 1 7 4 のそれぞれが、囲い板容器 2 7 0 および 2 7 2 にそれぞれ取り付けられた 1 対の冷却囲い板 1 0 4 を有することが理解されよう。囲い板容器 2 7 0 および 2 7 2 は、製造後のガラス容器の熱的強化装置が配置されている支持部材 1 4 0（どちらも図 1 9 に示されている）の作動機構カバー 1 4 5 に取り付けられたアクチュエータ機構 2 7 4 および 2 7 6（一般的には、それぞれがサーボ機構で駆動されるねじ機構である）によって、それぞれが電気機械的に上昇／下降される。

10

【 0 0 9 0 】

次に図 3 2 を参照すると、囲い板機構の半組立部品 1 7 4 の一部分が、中に含まれる機構のいくつかが見えるように切り取られている。具体的には、冷却囲い板 1 0 4 に冷却用空気を供給する伸縮式の囲い板空気供給管 2 8 0、および底面冷却ノズル 1 1 0 に冷却用空気を供給する伸縮式のベース空気供給管 2 8 2 が示されている。したがって、囲い板機構の半組立部品 1 7 4 が上昇／下降されるとき、供給管 2 8 0 および 2 8 2 が延び／縮みすることになる。囲い板空気供給管 2 8 0 は、囲い板容器 2 7 2 と囲い板容器 2 7 2 の中にある冷却囲い板 1 0 4 の両方との中間に配置された囲い板冷却空洞 2 8 6 に冷却用空気を供給する通路 2 8 4 に通じる。

20

【 0 0 9 1 】

好ましくは、冷却囲い板 1 0 4 は、囲い板冷却空洞 2 8 6 が冷却囲い板 1 0 4 の頂部および底部で封止されるように、囲い板容器 2 7 2 の中に設置され、その結果、囲い板空気供給管 2 8 0 を通って供給される冷却用空気が、すべて冷却囲い板 1 0 4 の垂直の開口 1 1 2 および角を成す開口 1 1 4（これらは図 5 および図 6 に最もよく示されている）を通過して配送されることになる。冷却囲い板 1 0 4 は、任意選択で冷却動作中に回転するが、このことは図 3 5 の議論とともに以下で明白になるであろう（必要に応じて、冷却囲い板 1 0 4 は、軸方向に回転するように、任意選択で囲い板容器 1 6 0 に取り付けられてもよい）。

30

【 0 0 9 2 】

ベース空気供給管 2 8 2 は、冷却囲い板 1 0 4 の中の位置に底面冷却ノズル 1 1 0 を堅く支持するノズル供給管 2 8 8 に通じる。ベース空気供給管 2 8 2 を通って配送された冷却用空気は、底面冷却ノズル 1 1 0 の、中央に配置された開口 1 3 2 および角を成す開口 1 3 4（図 1 6 から図 1 8 に示されている）に配送されることになる。

【 0 0 9 3 】

次に図 3 3 および図 3 4 を参照して、囲い板機構の半組立部品 1 7 2 のさらなる詳細が示されている。囲い板回転機構の位置は、参照数字 2 9 0 で示される。また、囲い板容器 2 7 0 の冷却囲い板 1 0 4 の下にカレットシュート 2 9 2 の位置が示されている。冷却囲い板 1 0 4 が、底部で（頂部でも）開かれており、また、ノズル供給管 2 8 8 および底面冷却ノズル 1 1 0 が、冷却囲い板 1 0 4 の底部の開口の大部分を遮断せずに残すように寸法設定して配置されているので、万一、ガラス容器 1 0 0 が冷却囲い板 1 0 4 の内部にある間に壊れたとしても、壊れたガラスは、冷却囲い板 1 0 4 からカレットシュート 2 9 2 の中へ自由に落下し得て、そこから収集領域（図 3 3 または図 3 4 には示されていない）に導かれ得ることに注目されたい。

40

【 0 0 9 4 】

次に図 3 5 を参照すると、冷却囲い板 1 0 4 が冷却動作中に回転する実施形態に使用さ

50

れる追加ハードウェアが示されている。上側軸受け 300 および下側軸受け 302 は、冷却囲い板 104 を囲い板容器 270 に回転可能に支持するのに使用される。上側軸受け 300 の下には上側封止部材 304 が配置されており、下側軸受け 302 の上には下側封止部材 306 が配置されている。必要に応じて、囲い板空気供給管 280 (図 32 に示されている) も、(図 32 に示された通路 284 に加えて) 追加の通路 308 を通して冷却用空気を供給することができる。囲い板容器 270 の側面に、取付け面 310 が示されている。最後に、冷却囲い板 104 を回転させるための位置決めピン 312 が、囲い板容器 270 の底面の近くに示されている。モータおよびリンク駆動装置 312 は、図 35 には示されていない。

【0095】

次に図 36 から図 38 を参照すると、本発明によって実施される製造後のガラス容器の熱的強化工程のための例示的製造ラインが、ホットエンド(本明細書には示されていないが、ガラス容器を成形する IS 機である)の下流で、コールドエンド(本明細書には示されていないが、コーティングおよび検査の装置である)の上流に配置して示されている。特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉 220 には、供給コンベア 210 が通っている。IS 機(図示せず)で形成されたガラス容器 100 が、IS 機から排出された後に、図 36 に示されるように、特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉 220 の右側で供給コンベア 210 上に配置される。ガラス容器 100 は、特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉 220 に入るとき、一般におおよそ 500 とおおよそ 600 の間にある。

【0096】

特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉 220 は、一般に、入り口区域(図 36 の右側に示される)でのおおよそ 600 から、出口区域(図 37 の右側に示される)でのおおよそ 715 の範囲の温度に設定される。特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉 220 に関する一般的な寸法は、おおよそ 16 フィート(4.9 メートル)の長さである。特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉 220 は、例えば 4 つの独立した温度制御区域を有してよい。ガラス容器 100 は、特別な焼き戻しのガラス焼きなまし炉 220 の中で、一般に 2 分 30 秒から 3 分 30 秒の間の時間をかけて、おおよそ 620 からおおよそ 680 の温度に加熱されることになる。ガラス容器が 620 より低温であると、本発明によって実施される製造後のガラス容器の熱的強化工程において適切な圧縮応力を得ることができず、また、ガラス容器がおおよそ 680 より高温であると、変形が生じる恐れがあるので、この範囲は重要である。

【0097】

製造後のガラス容器の熱的強化工程の遂行に続いて、熱的に強化されたガラス容器 100 が、口板 212 上に置かれる。次いで、熱的に強化されたガラス容器 100 は、押し機構 216 によって排出コンベア 214 に押し進められ、排出コンベア 214 が、製造後のガラス容器の熱的強化装置から、熱的に強化されたガラス容器 100 を運び去る。熱的に強化されたガラス容器 100 は、依然としてかなり高温であるので(歪み点 70 よりかなり低温で均一であるが)、コールドエンド装置(本明細書には示されていない)に到達する前に、より十分に冷えるように、概略的に示された冷却用ファンの配列 320 からの冷却用空気にさらされてよい。図 37 および図 38 には、製造後のガラス容器の熱的強化装置から落下する割れたガラスを収集するためのカレットシュート 292 も示されており、割れたガラスは収集ピン 322 に収集される。

【0098】

次に図 39 から図 41 を参照すると、図 42 に示されるような冷却囲い板 104 の底部に取り付けるための代替実施形態の底面冷却器 340 が示されている。ガラス容器 100 の底面の直下で中央に配置される、図 5 および図 6 に最もよく示された底面冷却ノズル 110 を使用する代わりに、底面冷却器 340 は、優れた底面冷却特性を提供する一方で、本明細書で説明された製造後のガラス容器の熱的強化法の遂行中に欠陥のために壊れる可能性があるガラス容器 100 の部片に対して示す妨げがより少ないという点が有利であり得る。当業者なら、1 片の割れたガラスが底面冷却ノズル 110 上で動かなくなると、割

10

20

30

40

50

れたガラスを手作業で除去するために装置が停止されなければならないことを理解するであろう。

【 0 0 9 9 】

代わりに、底面冷却器 3 4 0 は、冷却囲い板 1 0 4 の内壁に近接してその底面の近くに全体が配置される設計であり、それ自体は、熱的に強化されるガラス容器 1 0 0 の底面の下で完全に開いている。底面冷却器 3 4 0 は、円筒状で中空の調節可能な外側スリーブ 3 4 2、円筒状で中空の内側スリーブ 3 4 4、および環状の固定要素 3 4 6 を含む。内側スリーブ 3 4 4 の外側の上部は、参照数字 3 4 8 で示されるように、その頂部で、断面が弓形に内側へ湾曲している。内側スリーブ 3 4 4 の底部は、外面がねじ切りされている。

【 0 1 0 0 】

[0132] 調節可能な外側スリーブ 3 4 2 の内側の上部は、参照数字 3 5 0 によって示されるように、その頂部で、断面が弓形に内側へ湾曲している。調節可能な外側スリーブ 3 4 2 の内側には、内側へ湾曲した部分 3 5 0 の直下に配置された環状の窪み 3 5 2 がある。調節可能な外側スリーブ 3 4 2 は、外面から環状の窪み 3 5 2 の内部に通じる入口 3 5 4 も有する。調節可能な外側スリーブ 3 4 2 の底部は、環状の窪み 3 5 2 の少し下で内面がねじ切りされている。

【 0 1 0 1 】

調節可能な外側スリーブ 3 4 2 は、調節可能な外側スリーブ 3 4 2 の内側へ湾曲した部分 3 5 0 と内側スリーブ 3 4 4 の内側へ湾曲した部分 3 4 8 が、その間に間隙 3 5 6 を画定するように、内側のスリーブ 3 4 4 にねじ留めされ、間隙 3 5 6 は、底面冷却器からの空気出口になる。間隙 3 5 6 の寸法は、調節可能な外側スリーブ 3 4 2 を内側スリーブ 3 4 4 に対して回転させることにより調節され得る。一旦、間隙 3 5 6 が、希望どおりに調節されると、環状の固定要素 3 4 6 が、歯付きプリー 2 4 4 上の調節可能な外側スリーブ 3 4 2 と係合して、外側スリーブ 3 4 2 のさらなる回転を固定するまで、内側スリーブ 3 4 4 の外側のねじ山にねじ込まれる。

【 0 1 0 2 】

次に図 4 2 を参照すると、底面冷却器が、冷却囲い板 1 0 4 の底部の内側に配置されたスリーブ 3 6 0 の中に設置して示されている。スリーブ 3 6 0 の底部には、調節可能な外側スリーブ 3 4 2 の入口 3 5 4 と、スリーブ 3 6 0 の底面から延在する空気供給管 3 6 4 の間を連絡する通路 3 6 2 とがあることが理解されよう。したがって、空気供給管 3 6 4 から、冷却用空気が底面冷却器に供給され、冷却用空気は、底面冷却器から、調節可能な外側スリーブ 3 4 2 の内側へ湾曲した部分 3 5 0 と内側スリーブ 3 4 4 の内側へ湾曲した部分 3 4 8 の間の間隙 3 5 6 を通って、ガラス容器 1 0 0 の底面へ、高速度で導かれる。

【 0 1 0 3 】

図 3 9 から図 4 2 に示された底面冷却器は、流体ジェットのまわりの周囲空気の吸込みを招くコアンダ効果を利用する。したがって、調節可能な外側スリーブ 3 4 2 の内側へ湾曲した部分 3 5 0 と内側スリーブ 3 4 4 の内側へ湾曲した部分 3 4 8 の間の間隙 3 5 6 から放出される流体ジェットが、内側スリーブ 3 4 4 の頂部の近くで内径の近くにある周囲空気を吸い込むことになり、それによって、ガラス容器 1 0 0 の底面に導かれる空気の量が増加して、ガラス容器 1 0 0 の底面の冷却効率が向上する。

【 0 1 0 4 】

最後に図 4 3 および図 4 4 を参照すると、製造後のガラス容器の熱的強化装置および関連した方法の代替実施形態が概略的に示されている。図 4 3 および図 4 4 に概略的に示された方法は、再加熱されたガラス容器 1 0 0 を供給コンベアから取り出し、ガラス容器 1 0 0 を熱的に強化して、次いで、熱的に強化されたガラス容器 1 0 0 を排出コンベアの上に置く装置を使用するのではなく、熱的強化工程を通じて、空気を通す多孔性のコンベア 3 7 0 上にガラス容器 1 0 0 を維持する。

【 0 1 0 5 】

その代わりに、再冷却囲い板 1 0 4 の底面が多孔性コンベア 3 7 0 の上面の真上に来るまで、冷却囲い板 1 0 4 と冷却管 1 0 6 および管ノズル 1 0 8 とが、再加熱されたガラス

10

20

30

40

50

容器 100 の上へ下降される。底面冷却要素 372 が、多孔性コンベア 370 および冷却囲い板 104 下に配置されて、冷却用空気を、上方へ、再加熱されたガラス容器 100 の底面に導く。同時に、冷却用空気が、再加熱されたガラス容器 100 の全高に沿って側面に供給されて外表面を冷却し、また、冷却管 106 および管ノズル 108 が、再加熱されたガラス容器 100 の中へ下降されて、内部を冷却する。冷却管 106 および管ノズル 108 は、前述のように振動されてよい。

【0106】

この代替実施形態により、2つの別々の方法が企図される。一実施形態では、熱的強化工程が遂行されている間、底面冷却要素 372 が停止され、その後、底面冷却要素 372 が動かされて、熱的に強化されることになる再加熱されたガラス容器 100 の次の組を進める。他の実施形態では、製造後のガラス容器の熱的強化装置が、底面冷却要素 372 と一緒に移動され、この場合には、底面冷却要素 372 が動作を停止せずに継続することができるように、熱的に強化する組は、縦方向に十分な数がなければならない。

10

【0107】

したがって、本発明によって実施される例示的实施形態の上記の詳細な説明から、この説明が、改善された工程によって製作されたガラス容器の強度の向上をもたらす、製造後の熱的強化工程においてガラス容器を熱的に強化するための装置における冷却囲い板を教示することが理解され得る。ガラス容器の強度のこの向上は、あらゆる設計の幾何学的形状のガラス容器に対して本発明によって実施される製造後のガラス容器の熱的強化工程によって得られる。製造後のガラス容器の熱的強化工程は、従来型の軽くないガラス容器と少なくとも同一の強度を有する、より軽いガラス容器の製造を可能にする。

20

【0108】

本発明によって実施される、製造後のガラス容器の熱的強化工程は、既存のガラス容器製造ラインのすべてではないにしても大部分に対して十分に適応可能である。さらに、製造後のガラス容器の熱的強化工程は、ガラス容器製造ラインのホットエンドで既存の IS 機の交換または再構成のいずれかを必要とすることがない。製造後のガラス容器の熱的強化工程は、ガラス容器の硬度特性を変更させるのに、化学的強化方法を用いる必要性なしにガラス容器を強化する。

【0109】

本発明によって実施される製造後のガラス容器の熱的強化工程に使用される装置は、耐久性と長寿命の両方を備えた構造にする必要があり、また、その動作寿命を通じて、ユーザによる保守整備が、ほとんど、またはまったく不要なはずである。本発明によって実施される製造後のガラス容器の熱的強化工程によってもたらされる利点は、その市場訴求力を実質的に強化し、それによって、同容器に、可能な限り広範な市場を与える。最後に、本発明によって実施される製造後のガラス容器の熱的強化工程の前述の利点および目標のすべてが、いかなる重要な相対的不都合も招くことなく達成される。

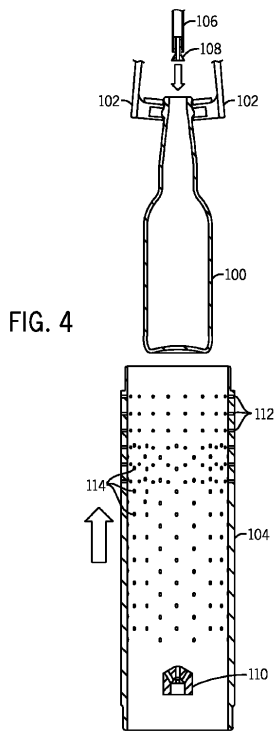
30

【0110】

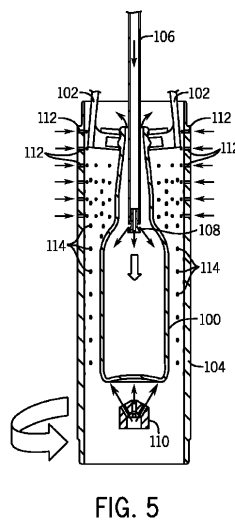
本発明によって実施される製造後のガラス容器の熱的強化工程の前述の説明は、その特定の実施形態および適用例を参照しながら示され、説明されてきたが、実例および説明の目的のために提供されたものであって、網羅的なものでも、本発明を開示された特定の実施形態および適用例に限定するように意図されたものでもない。本明細書で説明された本発明に対して、本発明の精神または範囲から逸脱することなく、多数の変更、修正、変形、または改変が行なわれ得ることが当業者には明らかであろう。これらの特定の実施形態および適用例は、本発明の原理および実用的応用例について最善の説明を提供することによって、当業者が、様々な実施形態で、企図された特定の利用法に適する様々な修正を加えて、本発明を利用することができるように選択して説明されたものである。したがって、このような変更、修正、変形、および改変のすべては、添付の特許請求の範囲が、適正に、法律的に、公平に権利を与えられた広さによって解釈されたとき、同範囲によって決定される本発明の範囲内にあるものと見なされるべきである。

40

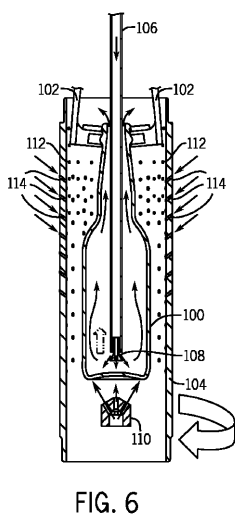
【 図 4 】



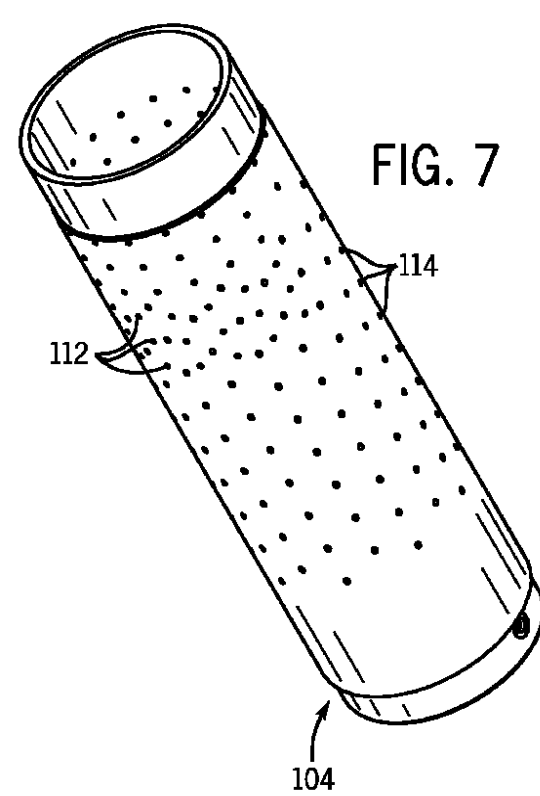
【 図 5 】



【 図 6 】



【 図 7 】



【図 8】

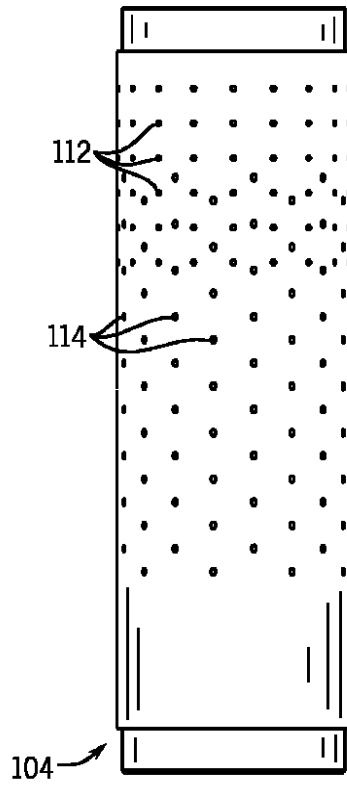


FIG. 8

【図 9】

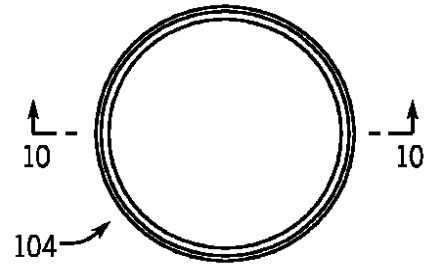
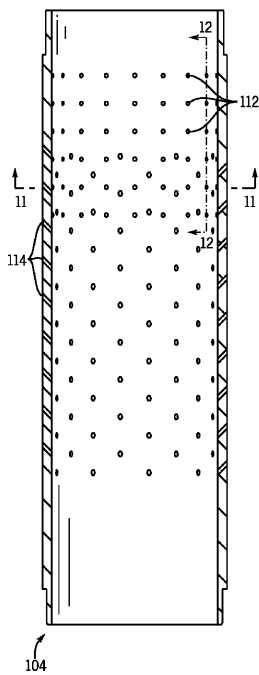


FIG. 9

【図 10】

FIG. 10



【図 11】

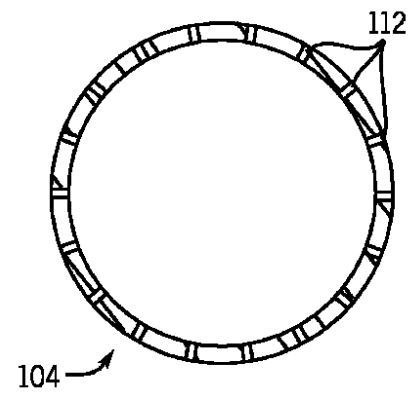
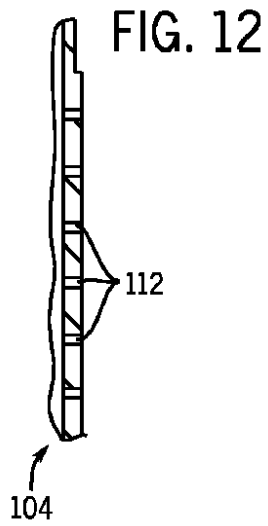
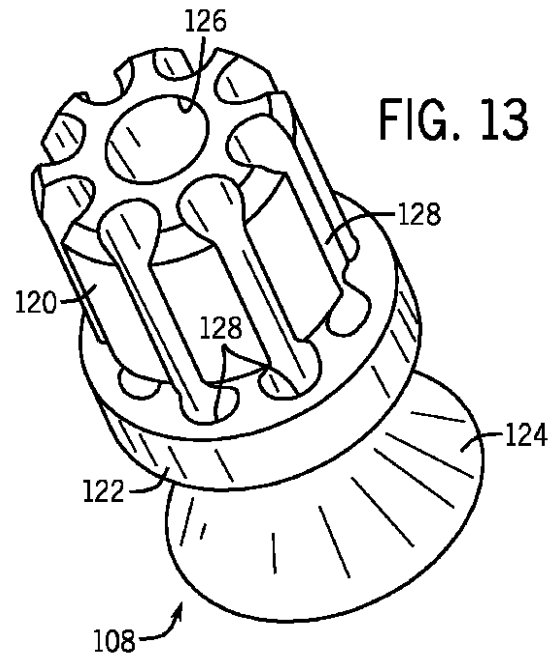


FIG. 11

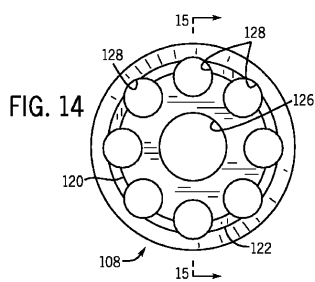
【図 12】



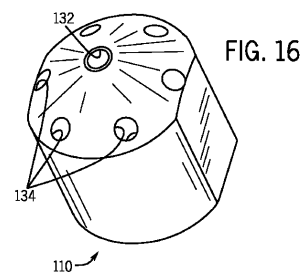
【図 13】



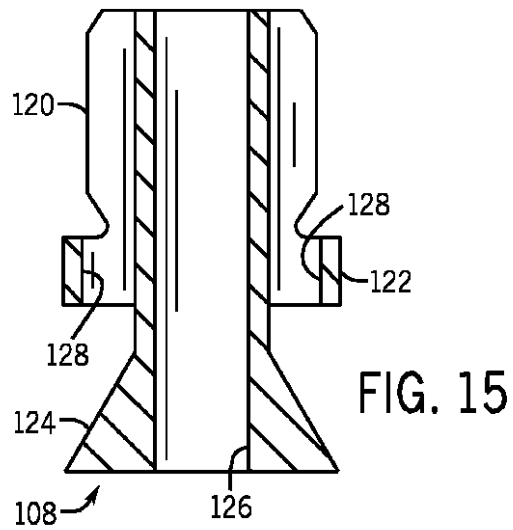
【図 14】



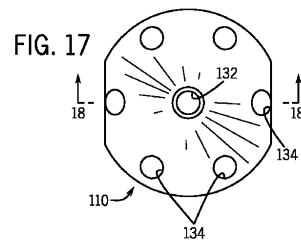
【図 16】



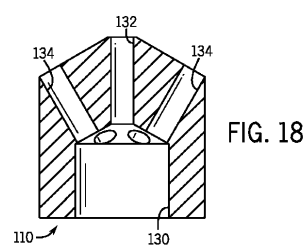
【図 15】



【図 17】



【図 18】



【図 19】

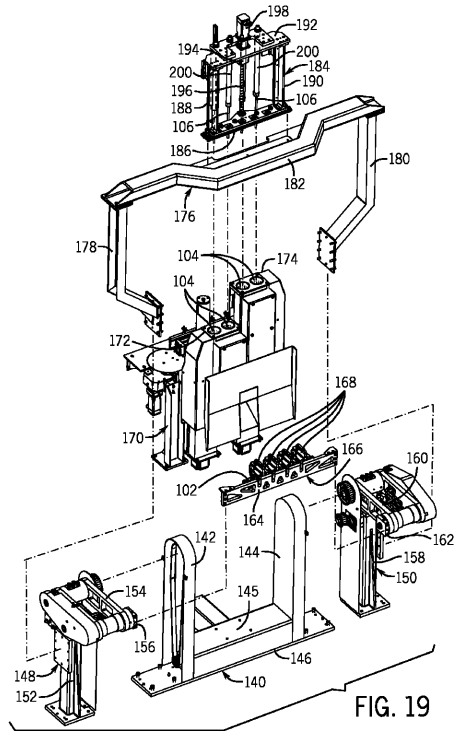


FIG. 19

【図 20】

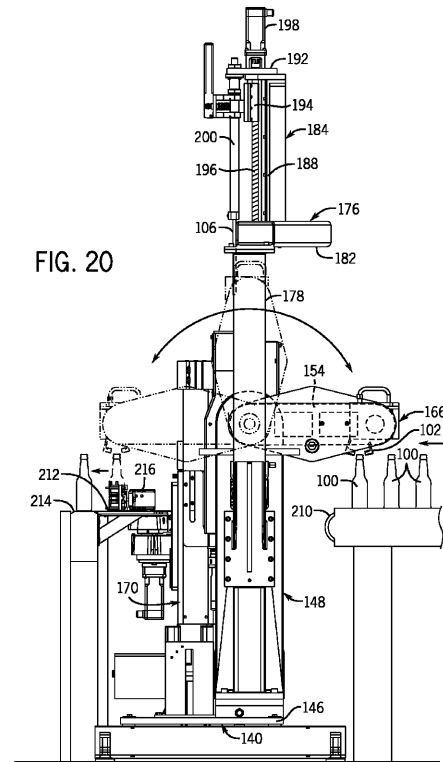


FIG. 20

【図 21】

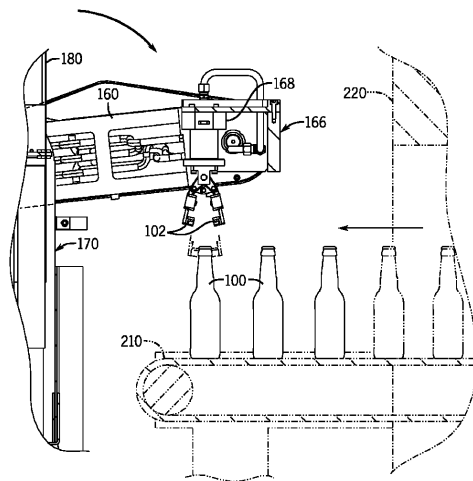


FIG. 21

【図 22】

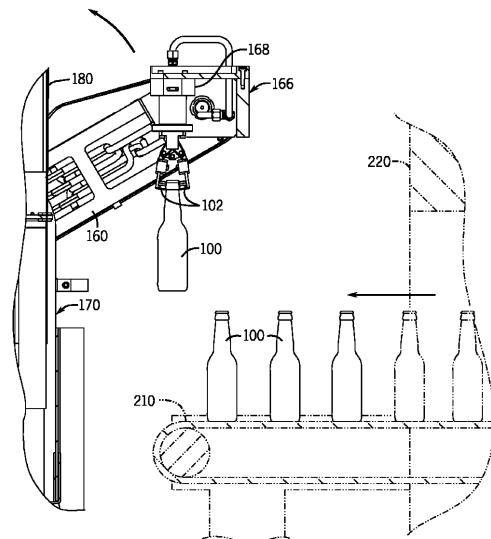
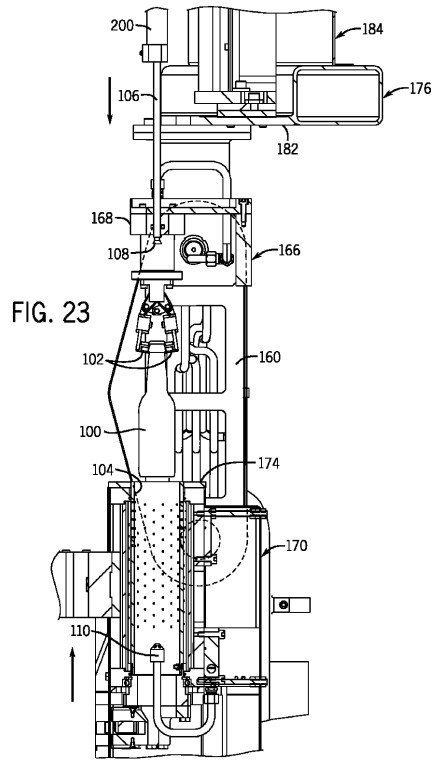
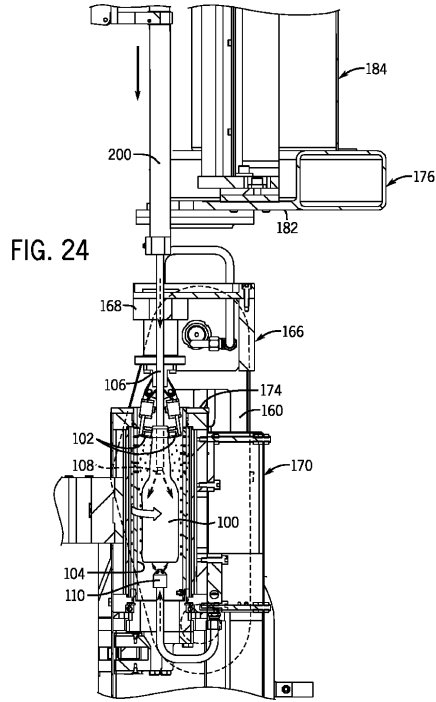


FIG. 22

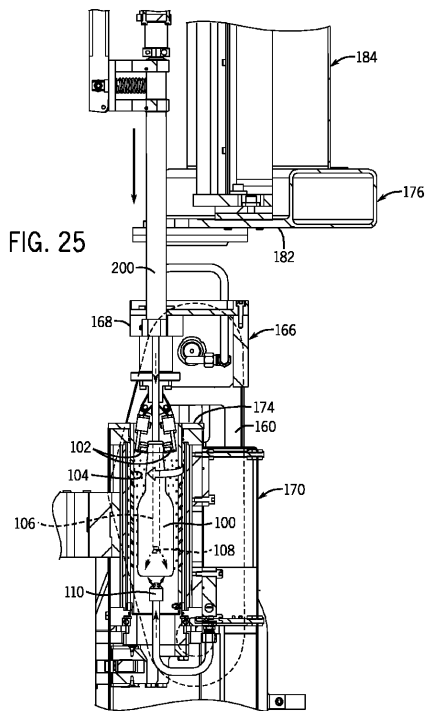
【図 23】



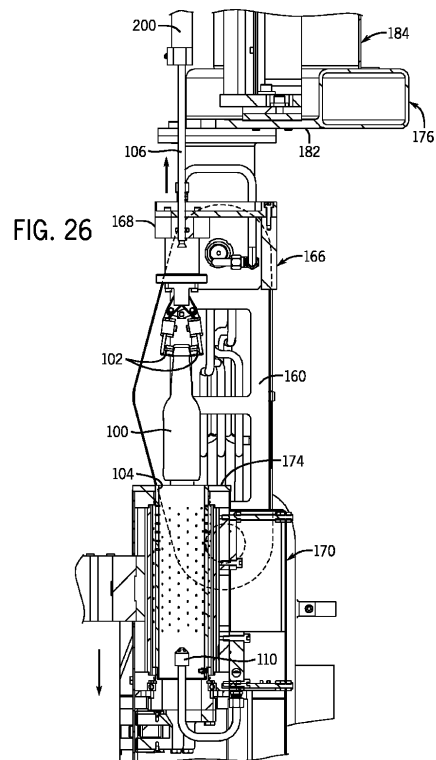
【図 24】



【図 25】



【図 26】



【図 27】

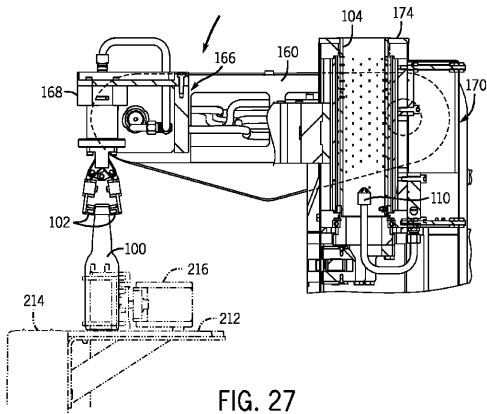


FIG. 27

【図 28】

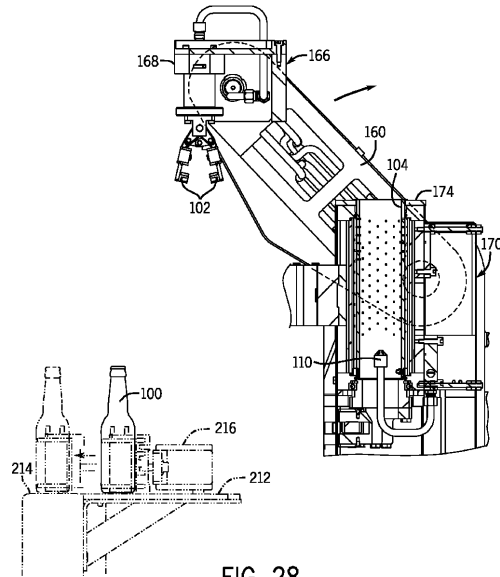


FIG. 28

【図 29】

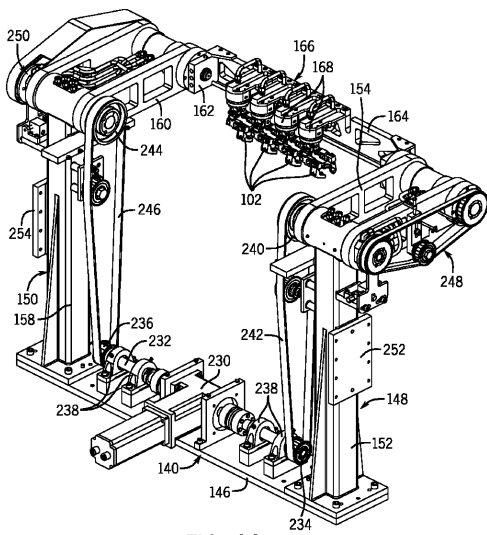


FIG. 29

【図 30】

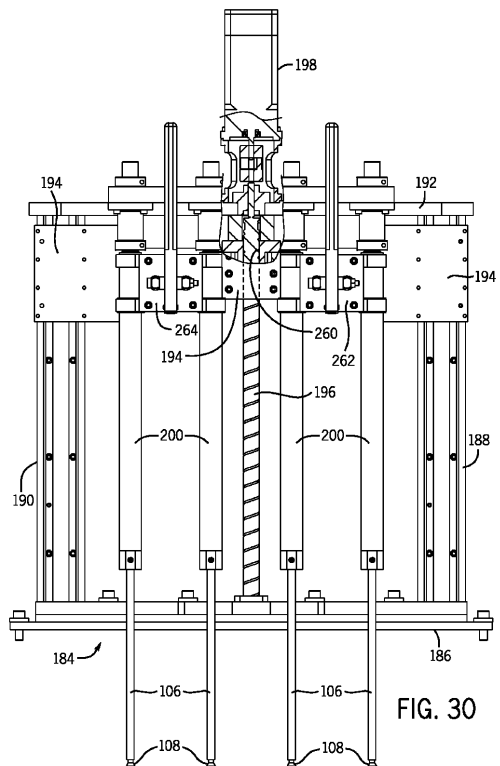
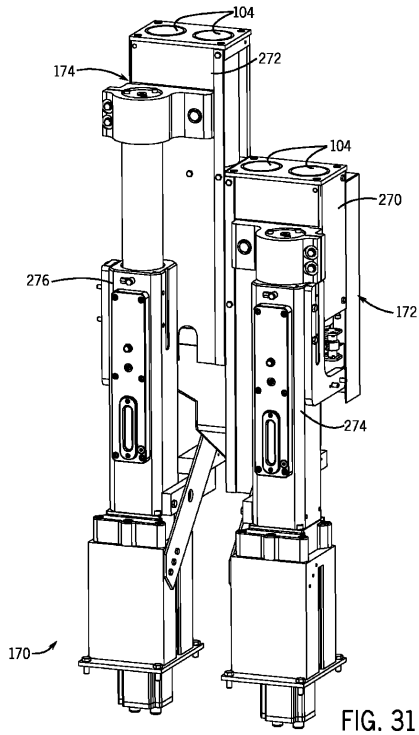
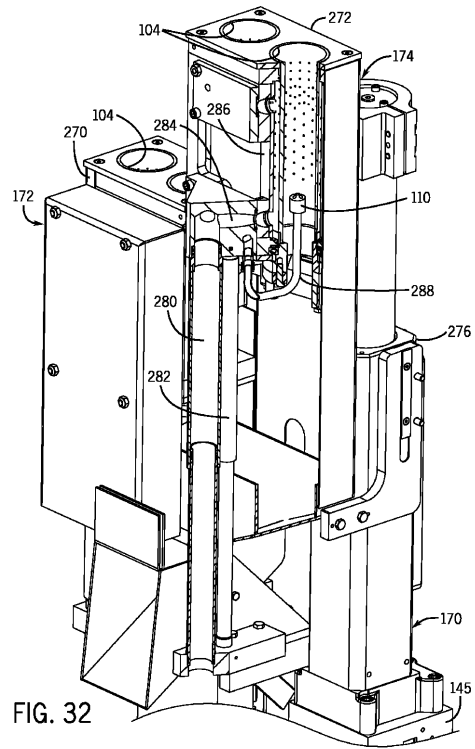


FIG. 30

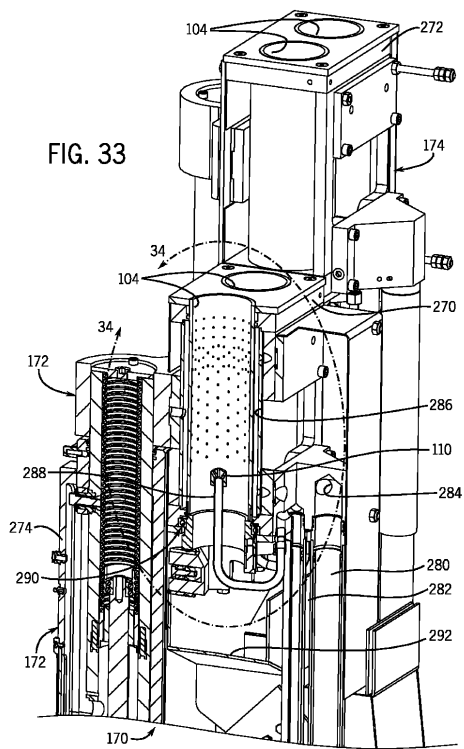
【図 3 1】



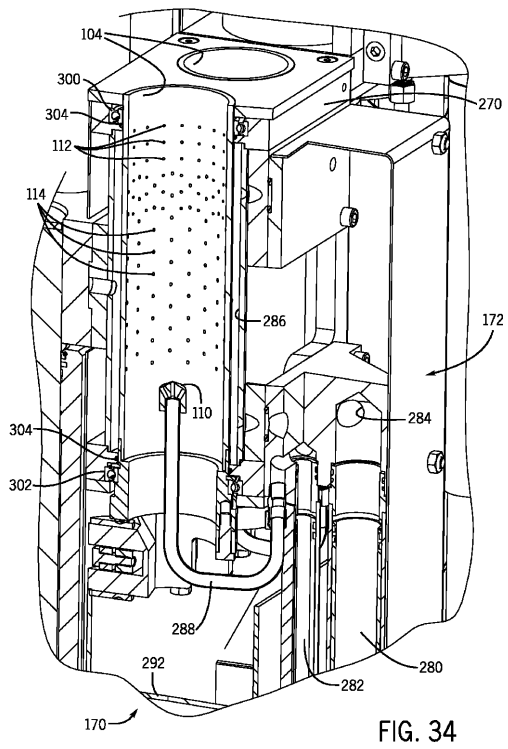
【図 3 2】



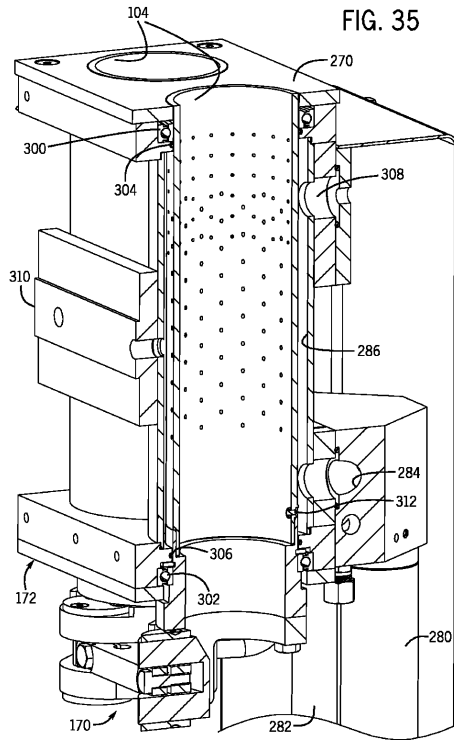
【図 3 3】



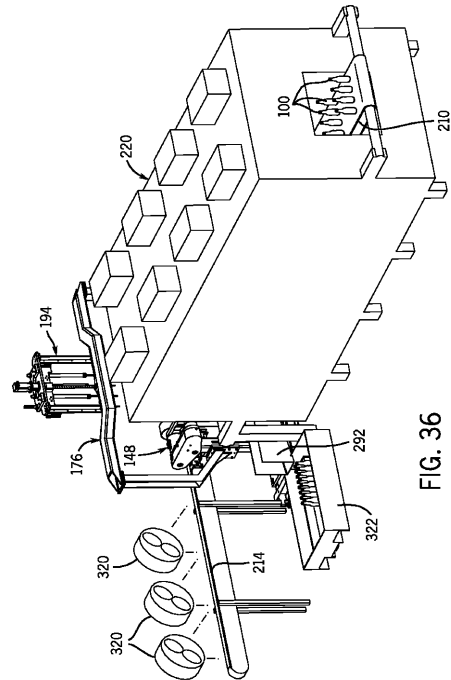
【図 3 4】



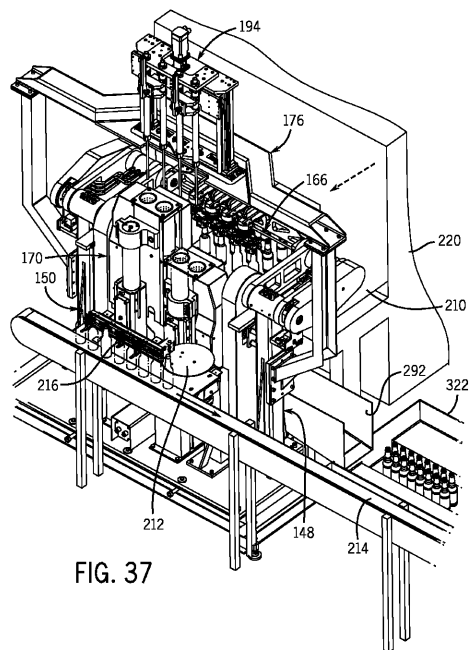
【図 35】



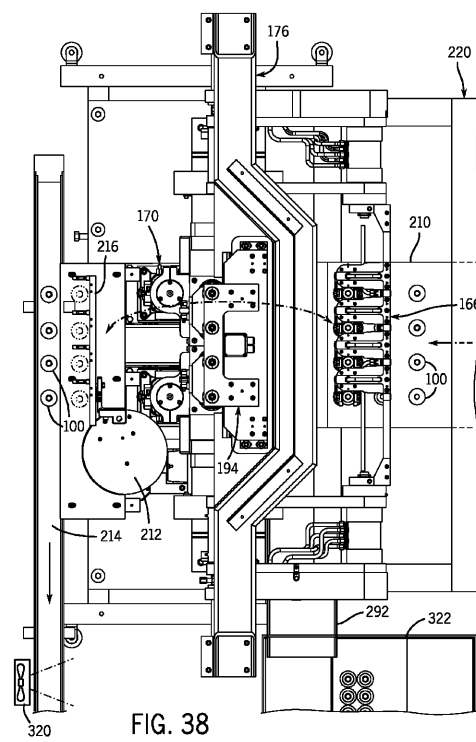
【図 36】



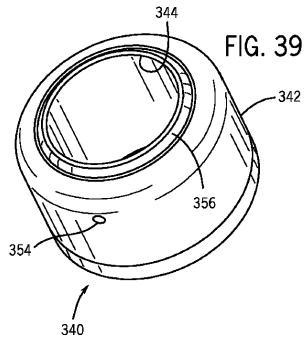
【図 37】



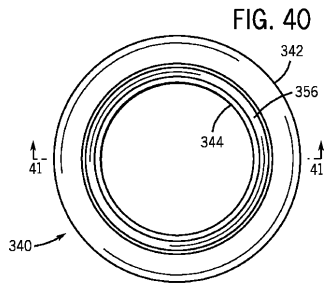
【図 38】



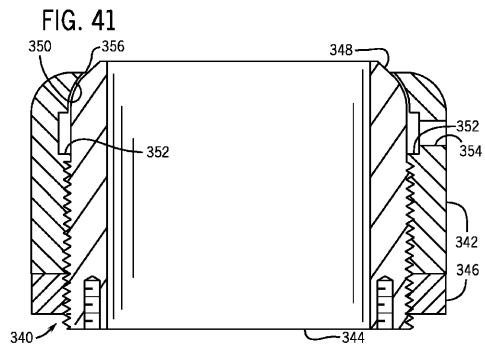
【図 39】



【図 40】



【図 41】



【図 42】

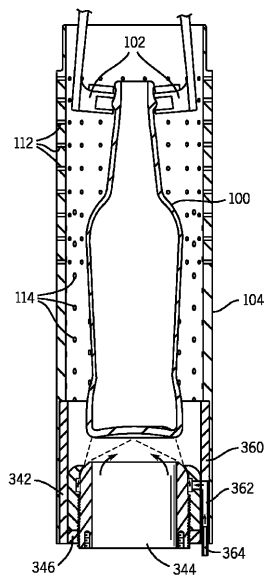


FIG. 42

【図 43】

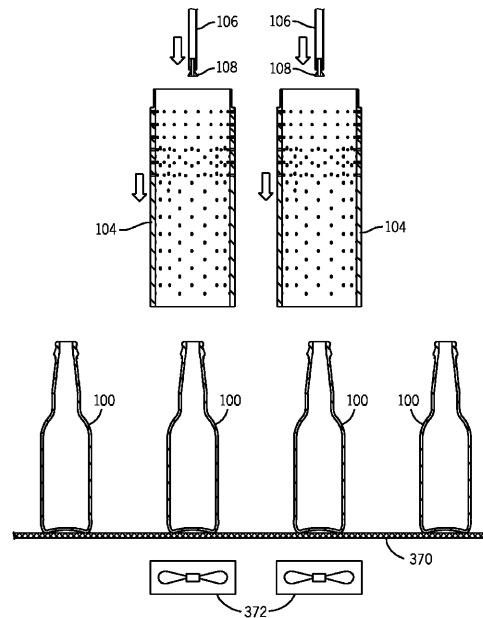
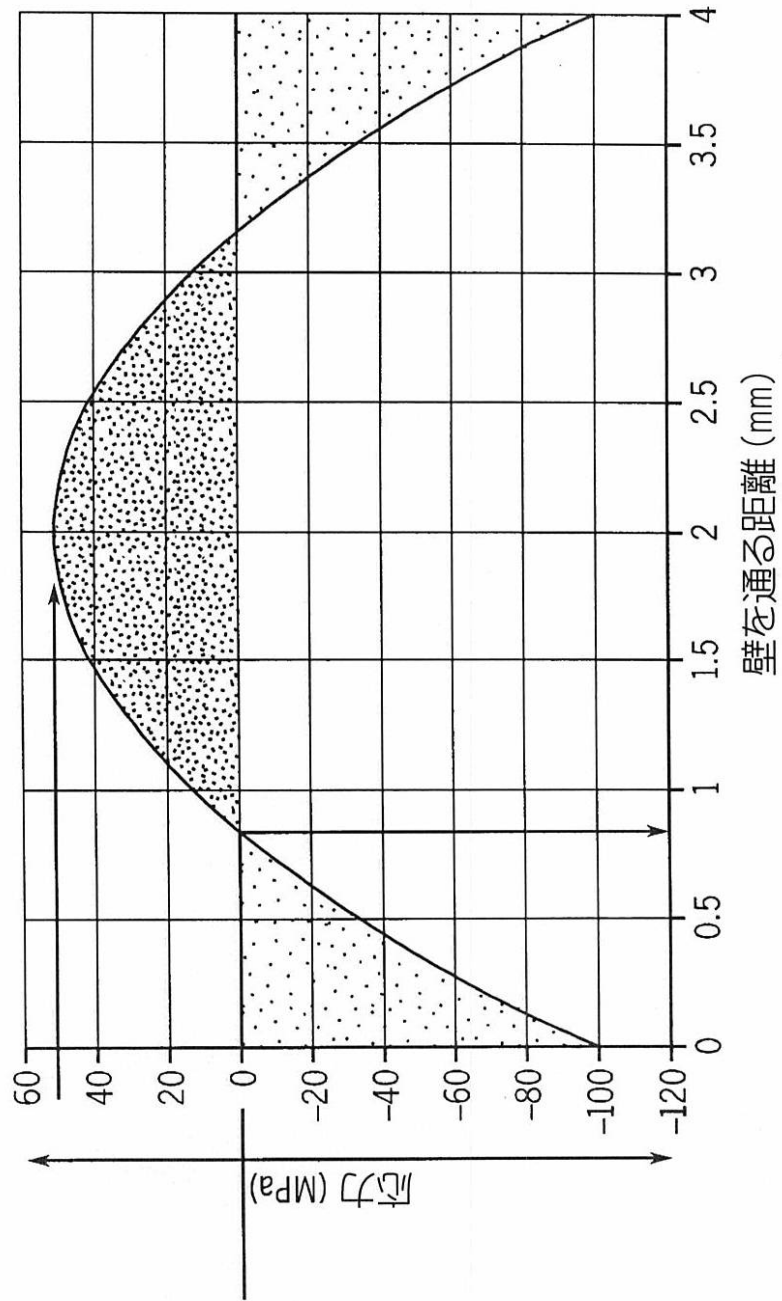


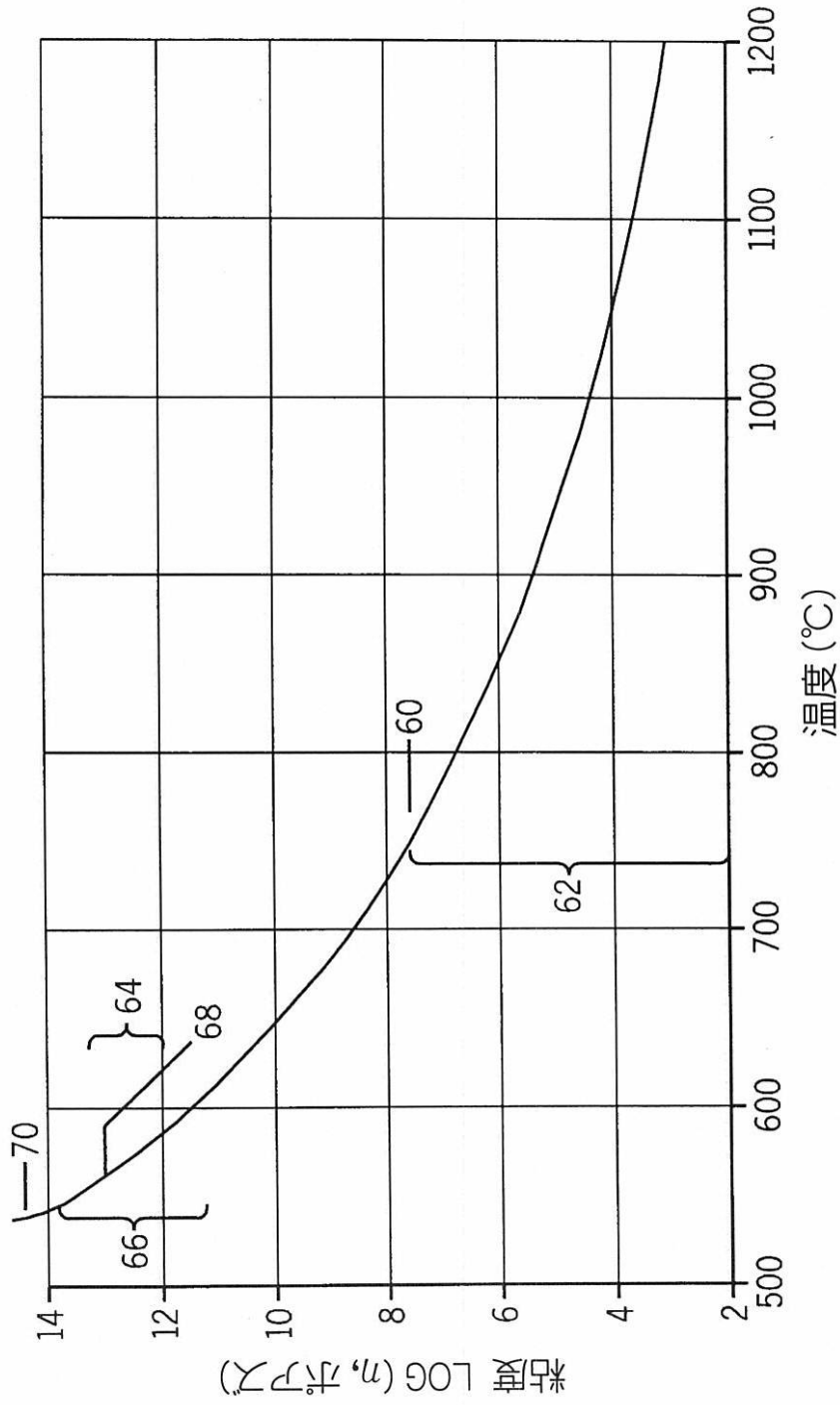
FIG. 43

FIG. 44

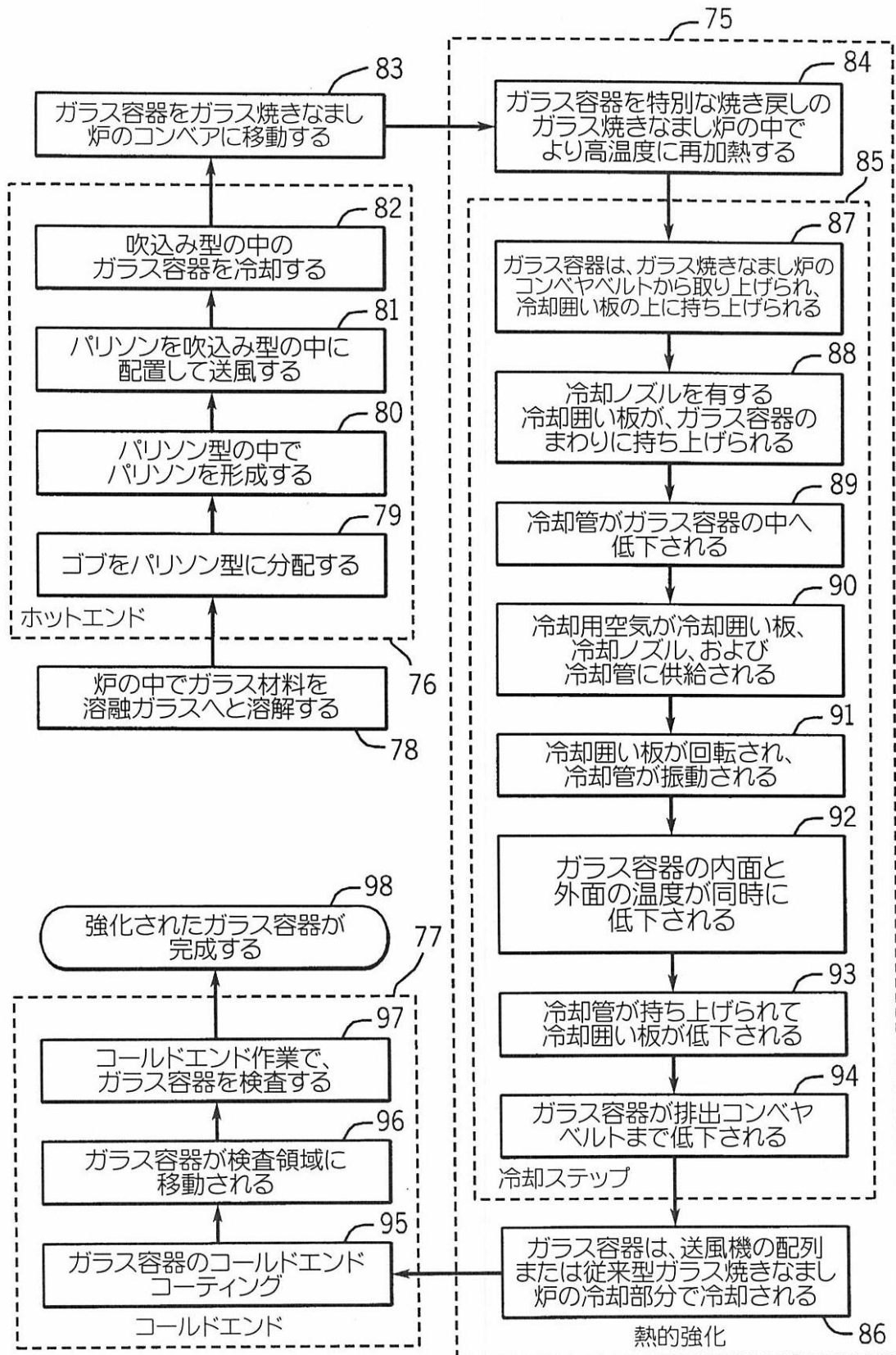
【図 1】



【図 2】



【図 3】



フロントページの続き

- (72)発明者 ロックハート, ロバート・ジェイ
アメリカ合衆国コネチカット州06457, ミドルトン, イースト・レイク・プレイス 22
- (72)発明者 ブラウン, スティーブン・ジェイ
アメリカ合衆国コネチカット州06060, ノース・グランビー, マウンテン・ロード 79
- (72)発明者 リングエット, ティモシー・エイ
アメリカ合衆国コネチカット州06085, ユニオンビル, ウィスパーリング・ロッド・ロード
17

審査官 吉川 潤

- (56)参考文献 米国特許第02375944(US, A)
米国特許第02180737(US, A)
米国特許第02269060(US, A)
米国特許第7694532(US, B1)
特開昭54-102322(JP, A)
特開昭60-118632(JP, A)
特開昭51-122981(JP, A)
実開昭51-134086(JP, U)
米国特許出願公開第2006/0016220(US, A1)
実公昭45-015263(JP, Y1)
特開平04-019400(JP, A)

(58)調査した分野(Int.Cl., DB名)

C03B	27/012		
C03B	9/30	-	9/36
F04F	5/14	-	5/18
B05D	1/00	-	1/22
B05D	7/00	-	7/32
B65D	1/00	-	1/10
B65D	23/00	-	23/08